
コ ラ ム

コラム1 スーパー警報

市澤成介

長崎豪雨のように記録的な豪雨の場合、その異常さを訴えるために、警報の中の警報「スーパー警報」の発表をすべきとの意見がある。2002年7月20日に長崎市で開催された、「防災フォーラム in ながさき 長崎大水害から20年 その教訓を活かして」において、東京大学社会情報研究所長廣井脩教授（当時）は次のような発言をしている。

当時の気象予報官が相当深刻な事態が発生するかもしれないと危機感を持って警報を出した。ところが、定型的な文章のパターンだったということもあって、プロとしての予報官の危機感が防災機関である長崎市などに伝わらなかった。つまり、警報レベルの雨の中でも、ウルトラ級の雨が降ることが予想される場合とそうでない場合がある、この違いをどう伝えるのか、つまり気象予報官の危機感をどう活かして防災に結びつけていくのか、この点についてはどうかと思います。当時、ウルトラ級の雨が予想される場合、スーパー警報を出したらいいのではないかという議論がずいぶんありました。

スーパー警報の発表の是非に関して気象庁は、長崎豪雨のような記録的な豪雨の予測が極めて困難なことや、警報に階級分けすることによる弊害等を考慮し、警報の量的予報の精度向上を図ることが大切であり、スーパー警報等の別種の警報を設けて運用することは適切でないとの結論を出した。しかし、異常な降雨が発現している状況をいち早く防災機関や住民に周知する必要があるとの判断により、1983年（昭和58年）10月1日から、担当予報区の過去の記録から見て、記録的な1時間雨量が観測されたときには、その状況を簡潔に表現して速報する「記録的短時間大雨情報」の運用を始めた。この「記録的短時間大雨情報」は、異常な降雨の発現を知らせるものであることから、報道機関等に対して住民周知への協力を要請した。これにより、TVでは、発表後速やかにテロップによりその内容を速報する仕組みができ、ポケベルや携帯メール等を用いて防災担当者にも送達される仕組みができています。

「記録的短時間大雨情報」の発表基準は、地域毎の降雨特性を考慮し設定されている。高知県、徳島県、三重県等の120mmが最も高く、長崎県、福岡県、鹿児島県等は110mm、東京都、大阪府、愛知県等は100mmとなっている。

長崎豪雨の後も、1993年（平成5年）鹿児島豪雨や2000年（平成12年）東海豪雨など、記録的な豪雨により甚大な被害をもたらした事例が各所で起こっている。それぞれの事例での様々な機関が実施した被災地での聞き取り調査などによると、「大雨警報」や「記録的短時間大雨情報」が避難行動に直接結びついていないことがわかった。

大雨警報や大雨に関する情報では、見出しを用いて降雨の異常性に言及するなどの工夫をしてきた。2000年東海豪雨時に名古屋地方気象台では、「名古屋で日雨量428mmを観測。9月の平年月降水量の1.8倍に達する。」「住宅・地下街への浸水等や河川の氾濫に嚴重に警戒」など、記録面からの異常性の訴えや、具体的災害への言及を行った。しかし、防災対応に繁忙なときに「大雨警報」や「大雨に関する情報」の中からその異常性を判断するゆとりも無いとの意見が多かった。

こうした意見を踏まえて、気象庁では、防災担当者が大雨警報等を受けたとき、自分の地域に関係する部分を簡単に読み取れるよう、2004年（平成16年）3月18日から、予報区毎の内容表記を行うなどの改善を図った。あわせて大雨警報の発表中に、土砂災害の発生の危険性が一層高まった場合には、大雨警報を更新発表し、その見出し（注意警戒文と呼ぶ）の冒頭に「重要変更！」のキーワードを付して、一層の警戒を喚起することとした。

平成16年7月福井豪雨の例でその部分を抜粋して示す。

平成16年7月18日07時14分	福井地方気象台発表
嶺北」大雨、洪水警報」雷注意報」	
嶺南」大雨、雷、洪水注意報」	
（重要変更！嶺北では土砂災害に嚴重に警戒して下さい。特に福井市、美山町、池田町、大野市付近では過去数年間で最も土砂災害の危険性が高まっています。また、河川の増水、低地の浸水にも嚴重に警戒して下さい。）	
嶺北北部 [重要変更] 大雨警報 [継続] 洪水警報 雷注意報	
特記事項 土砂災害警戒 浸水警戒	
雨 18日夕方まで	
1時間最大雨量	60mm
24時間最大雨量	200mm
付加事項 氾濫 突風 ひょう	
嶺北南部 [重要変更] 大雨警報 [継続] 洪水警報 雷注意報	
特記事項 土砂災害警戒 浸水警戒	
雨 18日夕方まで	
1時間最大雨量	60mm
24時間最大雨量	200mm
付加事項 氾濫 突風 ひょう	
(以下、省略)	

この「重要変更！」の運用は、大雨警報発表中に大雨の状況が過去10年程度の大雨事例を上回るような場合に、特に危険性の高まっている地域を特定して「過去数年で最も土砂災害の危険性が高まっている」と表記することで尋常でない旨を周知するものである。「スーパー警報」の運用ではないが、「重要変更！」の大雨警報を受けた場合は、一層の警戒が必要な状況に至ったと判断して行動して欲しい。

長崎豪雨災害発生1週間後の7月31日、台風10号による豪雨が中部地方を襲った。三重県美杉村においては土砂災害による大きな被害を被りながらも、伊勢湾台風における被災経験から消防団と村の末端行政を担う非常勤職員である組長(当時)がリーダーシップを発揮して、適切な避難誘導が図られ、全村で57か所に1,838人を避難させた。(当時の美杉村人口約10,700人、危険地域居住者約6,200人)

その結果、村民に1人の犠牲者も出さなかった。このことは299名のうち土砂災害により262名もの犠牲者を出した長崎豪雨災害と比較してあまりにも対照的であり、土砂災害による被害の防止軽減のためには、砂防関係施設を整備する、いわゆるハード対策だけではなく「土砂災害の発生を予測して適切な避難を図る」「土砂災害の危険のある地域を避けて居住する」といった、いわゆるソフト対策を一層強化すべきであることを示唆することとなった。

災害直後の昭和59年3月、長崎県土木部によって策定された「長崎防災都市構想」には土砂災害危険箇所の調査、警戒避難体制の充実、住宅地の立地抑制策等、ソフト対策の強化を含む内容が既に盛り込まれていた。しかし、この時点においては法律制定にまでは至らなかった。

「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」は法律の名前が長いので、略して「土砂災害防止法」または「土砂新法」、あるいは単に「新法」と呼ばれている。特に、「新法」と呼ばれるのは、既に「砂防三法」としてあった「砂防法」「地すべり等防止法」「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」に加えて、平成12年5月8日に公布され平成13年4月1日から施行された新しい法律であるからである。

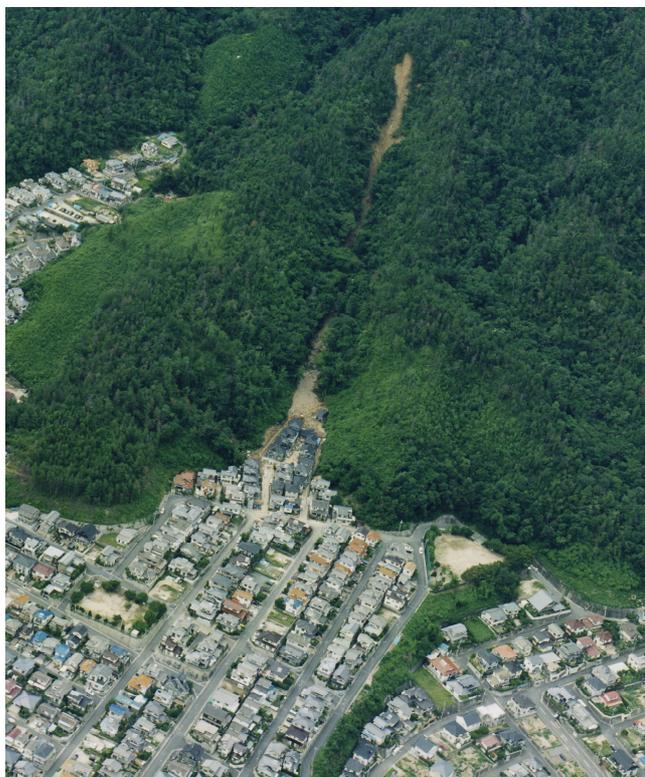
「新法」は建築基準法など他法令と一体となって、建築規制や開発行為の制限を盛り込むなど、土砂災害防止のためのソフト対策を総合化した画期的な法制度となっている。この「新法」を加えて、砂防三法に基づき実施している土砂災害防止工事の推進というハード対策と相まって、総合的な土砂災害防止対策が法律に基づいて実施されることとなった。

具体的な内容は、

- ① 土砂災害防止のための指針の作成
- ② 土砂災害に関する基礎的な調査の実施
- ③ 土砂災害警戒区域の指定及び警戒避難措置の充実
- ④ 土砂災害特別警戒区域における開発行為の制限等の実施

といった内容からなっている。

新法制定の直接のきっかけは、平成11年6月29日に広島市、呉市等を襲った土砂災害である。325か所で土石流やかけ崩れが同時多発的に発生し、24名のかけがえのない生命が土砂災害により奪われた。法律制定の起点と



写真コラム1 平成11年6月29日広島災害の被害状況
(広島市安佐南区伴東)
提供：国際航業株

なった「危険な地域に人家が密集しているさまを目の当たりにして、土石流やがけ崩れのような災害に対しては、危険箇所への手当を行うとともに、抜本的には危険な地域に家が建つことを事前に防止する措置をとる必要がある。このため、法的な措置も含め有効な方策を集中的に検討する必要がある」という関谷建設大臣からの小淵総理（いずれも当時）への報告は、都市域を襲った長崎豪雨災害と同じ教訓に基づくものであるといえる。長崎豪雨災害後の17年の歳月、そして、その間に幾度も繰り返された痛ましい土砂災害を経て、「長崎防災都市構想」等において指摘されていた内容が、ようやく法律に基づく施策として実現したわけである。

「新法」の内容と同様の枠組みを構築する必要性が、長崎豪雨災害の時点において既に教訓として認識されていたという点は注目されるべきであると考えられる。

【参考文献】

土砂災害防止法解説（2000年11月、土砂災害防止研究会編著）

自然災害を防ぐために建設された構造物が存在すれば安全といえるだろうか？一般的に言うと防災対策としての構造物は、起こりうる現象の発生する確率がある程度高い、一定の現象と規模を前提条件として造られている。したがって、期待される規模の現象に対しては安全が確保される。しかし、相手が自然現象である防災にとって、計画規模以上の現象の発生もありうるわけで、その点を考えれば、その効果には自ずと限界があるということを理解しておくことが大切である。

効果に限界がある、すなわち災害を完全に防ぎきれないようでは、防災施設を建設することは無意味ではないかという意見がでてくるだろう。しかし、そう理解するのは短絡的で、「確率的には小さいが、規模の大きい場合には、完全に防ぎきれない」ということは、言い換えれば、「発生する確率がより高い、計画規模以内の現象」に対しては災害を防いで、住民の生命と財産を守るということを意味している。すなわち、防災施設があった方が無施設の状態に比べると、生命と財産の安全度は確実に向上しているといえる。

気をつけねばならない点は、構造物による被害防止には一定の限界があるということがつい忘れ去られてしまい、防災施設が完成すれば「より安全になった」ではなく、いつしか「どのような規模のものに対しても絶対に安全になった……」と思われてしまいがちなことである。そして、その事が大雨の時などにおける住民避難の妨げとなっている可能性も考えられる。これは構造物（防災施設）に対する一種の過信が招く油断とも考えることができる。

住民が、「どのような規模の現象に対しても防災施設があれば、絶対に安全である」といった誤った理解に陥らないように、すべての人工構造物に共通することとして、常にその効果には限界があるということを、普段から知らせる努力、啓発・広報活動が重要である。

江戸の鎖国時代において日本の唯一の外港であった長崎の歴史を見守ってきた中島川。そこには近代土木遺産が多い。その一端を紹介する。

○ デ・レーケの護岸

1877年(明治10年)、1882年(明治15年)の再度に亘る、長崎港内の係留泊地^{はくち}(安全に船が碇泊できる水面)、航路(水脈・滯^{みど})の維持浚渫を目的として、県が内務省御雇工師オランダ人ヨハネス・デ・レーケに依頼した、報告書「築港計画及港内取締規則制定」が変流工事の着想である。その後、変更はあったが、計画は次の通りである。

中島川を中央橋付近から約90°右にカーブさせ、出島、江戸町間の水路にもってくる。付け替えた河川幅を確保するため、出島北側(現在の左岸側)を約15m位切り取り江戸町側(右岸)は、出島側法線に平行に一定川幅を維持する様に一部切り取りと埋め立て護岸とする計画である。これにより、市内中央部を流れる中島川上流からの流下土砂が港内に堆積し、港内埋没を起こす現象の対策として、大波止側の港内不要部に川筋を変えて放流しようとした。

この工事は、1882年(明治15年)から1889年(明治22年)に実施された港湾改良工事に伴う河道改修であり、これが現在の河口部の河道となっている。砂岩を用いた布積護岸がデ・レーケの遺構として残されている。

○ 出島橋

中島川変流工事での河道付け替え工事に伴ない、1890年(明治23年)出島の西側に新川口橋が架けられた。工事材料を米国に注文し、錬鉄のピン結合のプラットトラス橋であり、我が国に於ける鉄製トラスの初期の頃のものである。

その後、旧出島橋が老朽化したため、この新川口橋が1910年(明治43年)移設架橋されたのが今の出島橋である。長崎市を代表する近代化遺産であり、供用中の鉄橋では日本で最古のものである。

100年を経た現在まで活用されており、明治時代に造られ、限られた技術で設計や施工者が知恵を



写真コラム-1 中島川河口付近
(左岸の護岸がデ・レーケの遺構、その奥が出島居留地)
提供：川原 孝



写真コラム-2 出島橋
提供：川原 孝

絞り造ったものからは、技術のすばらしさとともに、永きに渡って活躍できる土木構造物の魅力を感じさせる。なお、平成 15 年度には「選奨土木遺産」として土木学会から認定・表彰を受けている。

○ 鍔橋くろがねばし

1632 年（寛永 9 年）に架設した長崎最初の橋で、木廊橋（屋根つき橋）であったが、橋体は何度か流失し、1867 年（慶応 3 年）の洪水で流されたのを鉄製橋で復旧したものである。1868 年（慶応 4 年）井上聞多（後の元老井上馨）が、長崎に判事兼外国官判事として赴任してきた。この井上が「出水の度に架け換えねばならぬ木橋大橋に、何か恒久的な策がないか」と、蘭通詞であり、測量、製鉄、造船などの技師であった本木昌造に相談した結果、本木は鉄の架橋を進言し、設計はドイツ人ポーゲに依頼し、長崎製鉄所が架設した。

我が国最初の鉄橋・くろがね橋（通称てつ橋）が完成し、鉄製橋の第一号が長崎で出来たことの歴史的意義は大きい。1868 年（慶応 4 年）8 月 1 日に渡り初めがおこなわれ、翌月の 9 月 8 日に明治と改元された。

その後、1932 年（昭和 7 年）に鉄筋コンクリート橋に架換えられている。

この橋が、長崎一の繁華街浜町商店街の入り口になっていることは良く知られている。

○ 石橋群

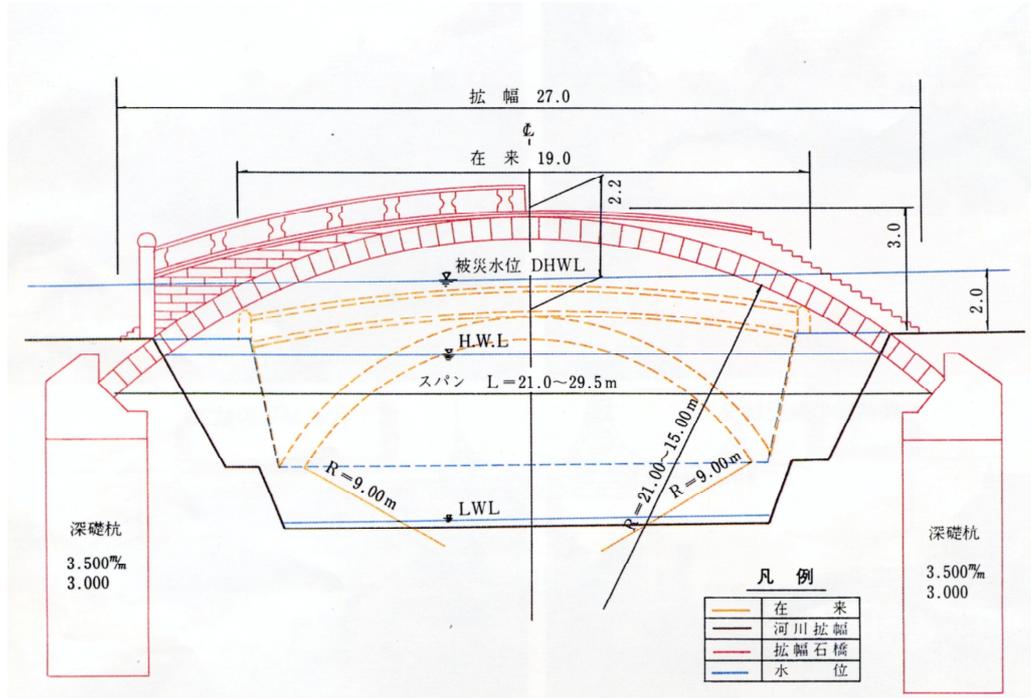
我が国最初の石拱橋せつきようきょう（石造りアーチ橋）「眼鏡橋」が出来たのは、1634 年（寛永 11 年）であった。興福寺二代目住職・唐僧黙子如定の創建と言われている。長崎に石造りアーチ橋が出現するのは眼鏡橋以後で、堂門川橋、玉帯橋、高麗橋……と続き、1600 年代には、石造り橋が 20 橋も架けられた。石造りアーチ橋の技術は中国から渡来したもので、長崎在留唐人の努力により架橋をみたものである。

長崎市は石橋文化発祥の地であり、長崎市を代表とする観光名所の 1 つとなっている。20m しかない川幅に、それぞれ約 100m 間隔で架けられていた。

石橋文化は、我が国では九州が 9 割以上を占めている。長崎（125）から熊本（313）大分（496）へ技術が伝えられ鹿児島（441）で華を咲かせた。（数字は現存するアーチ石橋数）特筆すべきことは、岩国藩主吉川広嘉きつかわひろよしが病氣治療のため長崎に居たとき、これら石橋から木橋アーチ型のヒントを得て、錦帯橋（1673 年（延宝元年）創建）を造ったと言われている。長崎豪雨災害では、大井手橋おおいでばし、編笠橋あみかさばし、古町橋ふるまちばし、一覽橋いちらんばし、芋原橋すずきはらばし、東新橋ひがししんばしの 6 橋が流失し、眼鏡橋めがねばし、桃溪橋ももたにばし、袋橋ふくろばしが半壊した。

長崎豪雨災害では、これら石橋群の復元、復興をどうするか議論の中心であった。

石橋群の平面図をコラム図-2、石橋復元標準断面図をコラム図-1 に示すとともに石橋の諸元をコラム表-1 に示す。



コラム図-1 石橋復元標準断面図

提供：長崎市



コラム図-2 石橋群平面図

提供：長崎県土木部

コラム表-1 石橋群の諸元

中島川石橋群橋梁災害復旧

被災前の石橋					橋梁の復旧								単位:m	
橋名	スパン	拱矢	拱矢比	架設年代	被災状況	復旧	橋長	有効幅員	全幅員	拱矢	拱矢比	石張厚	石材	
阿弥陀橋	10.9	4.25	2.6	1690	被災なし(川幅拡幅)	PC中空床版橋	17.14	6.00	7.20			6cm,12cm	唐津石	
高麗橋	11.2	3.00	3.7	1652	被災なし(川幅拡幅)	PC中空床版橋	16.75	10.00	11.20			6cm,12cm	唐津石	
桃溪橋	9.8	3.70	2.6	1679	半壊	石橋修復								
大井手橋	17.1	4.30	4.0	1698	流出	PC中空床版橋	25.00	7.00	10.00			6cm,12cm	唐津石	
編笠橋	15.0	3.55	4.2	1699	流出	石橋復元	28.00	3.90	4.45	5.348	5.2		小長井石	
古町橋	13.8	3.50	3.9	1697	流出	石橋復元	21.00	3.60	4.20	4.288	4.9		唐津石	
一覽橋	15.7	4.45	3.5	1657	流出	石橋復元	24.60	3.75	4.35	6.474	3.8		中国福州石	
芋原橋	13.8	4.10	3.3	1681	流出	PC中空床版橋	26.00	7.00	10.00			6cm,12cm	唐津石	
東新橋	16.0	4.25	3.6	1673	流出	石橋復元	29.50	3.80	4.40	7.683	3.8		唐津石	
眼鏡橋	8.3×2	4.20	2.0	1634	半壊	石橋修復								
袋橋	17.0	4.25	4.0	1655	半壊	石橋修復								

注) 高麗橋は、中島川支川西山川へ移設復元(西山ダム下流)

提供：長崎市



写真コラム-3 本河内高部水道堰堤

提供：川原 孝

○ ほんごうちこうぶすいどうえんてい 本河内高部水道堰堤

1891年(明治24年)に完成した、日本最初の近代水道ダムである。現在、上流部に「長崎水害緊急ダム事業」で新規ダムを施工中である。煉瓦製の導水トンネルの両横に管理用階段を配置し、格調高い美しいダムである。

○ ほんごうちていぶすいどうえんてい 本河内低部水道堰堤

1903年(明治36年)本河内高部水道堰堤の下流に完成した日本で2番目のコンクリート水道ダムである。設計・監督は、本河内高部水道堰堤と同じく よしむらちようさく 吉村長策(第14代土木学会長)であった。また、放水路橋は、日本初のRC

充腹アーチ橋である。本河内高部水道堰堤と本河内低部水道堰堤から、明治期の技術革新の推移を見ることができる。

○ 西山高部水道堰堤(明治時代のダム技術)

長崎市の水道拡張事業である西山ダムは、神戸市の布引ダム(神戸水道専用ダム)に続く我が国2番目の重力式コンクリートダムである。1900年(明治33年)8月に着手し、明治37年3月に完成した。当時のダムの作り方は、型枠の代わりとして上流面、下流面にコンクリートブロックを置き、内部に粗石を配置し、その隙間にコンクリートを流し、棒で突き固めながら築造した。コンクリートである細骨材及び粗骨材は、野母崎町高

浜の海砂、海砂利を、粗石は長崎市の西山、片淵かたふちのものを主に使用した。コンクリートの物理試験をした結果、空隙はかなりあるものの、強度的には今日のものほとんど変わらないことがわかった。100年前のコンクリートとは思えないほど立派なできばえである。

また、型枠ではなくコンクリートブロックを使ったのは、日本特有の石垣築造技術をもつ石工がかなりいたことも理由の1つである。

当時の新聞の人気投票では長崎名物の第1に水源池が選ばれており、市内はもとより県外からも見物に来るものが多かったことが報道されている。西山の水源地を読み込んだ次の歌もできた。

「長崎名所で 見せたいものは
にしやますいどう 西山水道に 三菱ドック
ハタ揚げするのが金比羅山に
たがみ 田上の合戦 かざがしら 風頭
……」

明治を代表する建物がすくなくなった今日、この西山高部水道堰堤は、明治の感じられる貴重な土木遺産である。

新西山ダムは、昭和57年の長崎豪雨災害を契機として、従来の水道専用ダムから、洪水調節を含む多目的ダムとして生まれ変わり、平成11年に完成した。

また、ダム下流には長崎水害で崩壊した石橋「高麗橋」を解体移設している。

アーチ石の主要部材は旧材

を、端部には石材を補足し（川幅が広がったため）、失われた高覧も復旧している。

現在、旧西山ダムはそのまま保存しており、新旧2つのダムが並んでいる。ダム周辺は散策路となっており、桜の名所であった当時の面影を残している。

○ 銅座川下水溝

ししときがわ
鹿解川、仁田川、浜町川など（第3節2. 中島川(1)概要参照）



写真コラムー4 本河内低部水道堰堤

提供：川原 孝



写真コラムー5 西山高部水道堰堤

提供：川原 孝

○ ^{ひみ}日見トンネル

長崎県が1924年（大正13年）に着手し、1926年（大正15年）に完成した。全長642m、幅員7.4mは、当時日本最大規模のトンネルである。長崎に通じる国道34号の唯一の動脈を果たしている。国登録文化遺産である。

以上、見てきたように河川延長が7kmしかない中島川には、土木遺産、文化財が100mピッチで点在している。これは川沿いだけの話で、流域全体では、文化財の宝庫である。ここを流れる都市河川中島川の治水と文化財とはどのようにして両立させればよいのか。各地にある文化財はもともと中小河川に沿っているものが多い。それは日常生活と密接に結びついた土木構造物であるからであろう。

長崎豪雨災害では、「長崎防災都市構想」のなかでも、中島川をどうするかが大きな課題であった。それは、都市の安全の確保と同時に、長崎市民にとっての住みやすさや景観の保全・継承といった両方を満足させねばならない、都市河川の難しさがある。

文化遺産の保全と都市の安全確保を両立させる方法として、長崎市民は、最終的には眼鏡橋の現地保存を選んだのである。結局は、河川は市民のものであり、市民全体の総意で決定しなければならないのであろう。

【参考文献】

土木学会ホームページ：「九州の土木遺産」 <http://www.qsr.mlit.go.jp/n-isan/>

長崎県 臨海開発局：「長崎港港湾史」、1997.3

長崎周辺の地名と災害との関連はどのように考えたらよいのであろうか。

昔の人は何度か土石流、地すべり、洪水の被害を受けた所を素直にそれにちなんだ地名とした。「南田川内」^{みなみだかわち}「後川内」^{うしろかわち}「西川内」^{にしかわち}「上川内」^{かみかわち}「三川内」^{みかわち}「田川内」^{たのこうち}「本河内」^{ほんこうち}「山川河内」^{さんぜんこうち}など、至る所に「カワチ」「コウチ」の地名がある。谷の状況を表したものであり、共通していることは谷間であること、川があることである。本河内がなぜホンゴウチか、また、「コウチ」と「カワチ」の使い分けもはっきりしない。長崎豪雨災害では、上記地区ではいずれも災害を蒙った。特に、本河内奥山（ホンゴウチオクヤマ）は、大規模な斜面崩壊により、24人の死者が出たところである。「矢の平」^{やのひら}「陰平」^{かげびら}「城平」^{じょうのひら}「川平」^{かわびら}「筒水平」^{とっぽみず}「赤水平」^{あかみず}「浜平」^{はまびら}「浪の平」^{なみのひら}「江平」^{えびら}などを表した地名は多く、これらは地すべりの結果生じた地形を表したものである。これらの地名に共通したものがあるとすれば、台地の上のやや平らかな地形である。平（ひら、びら）等があり、平はたいらという意味である。

浦上川の（旧浦上村）川平郷には、「金山平」^{かなやまびら}「内平」^{うちびら}「日向平」^{ひなたびら}「春平」^{はるびら}「陰平」^{かげびら}「筒水平」^{とっぽみず}「赤水平」^{あかみず}などがある。長崎豪雨災害では、「内平」が大災害を受け33人の死者が出た。「筒水平」、「赤水平」などは、湧水をあらわした面白い地名である。「筒水平」地区は、昔から湧水量が豊富であり、竹筒を地面に入れて水を出していた。また、赤水平の地名は水が赤色をしており、鉄分が含まれていることからきた名称であろう。地すべり地の田の状況を表した地名で、田の面積が小さくなることを表した、「飛田」^{とびた}「畦別当」^{あぜべつとう}「山田」^{やまだ}「畦刈」^{あぜかり}「六枚田」^{ろくまいた}等がある。地すべりの地質を表したものには、石、土、砂等の地名があつて、「滑石」^{なめし}「転石」^{ころびいし}「石原」^{いしはら}等があるがこれは地すべりの結果生じた破碎岩を指しているものであろう。峠を越えた長与町には、切りの名称として、「洗切」^{あらいきり}がある。

地名はこの例のように土地の成り立ち、地質を推論する上で有力な鍵となる。地名、地表を綿密に調査すれば、それとの関連ある地下構造との因果関係を推論し、防災に役立つであろうと思われる。土石流、崖崩れ、洪水、津波といった日本のどこかで毎年起こる自然災害と土地との関係、あるいは自宅周辺地の地形・地盤を知ることにより、自分を含めて家族をどう守るかという点に災害対策、水害対策の基本があるように思われる。

【参考文献】

鈴木 隆介：建設技術者のための地形図読図入門 第3巻 p.819

長崎豪雨災害で甚大な災害を蒙ったにもかかわらず、報道には取り上げることの無かった場所がある。ところは、^{すすきづか}芒塚地区の隣町の^{もぎ}茂木村^{さんぜんごうち}山川河内（現在の長崎市太田尾町山川河内）である。周りを山に取り囲まれた長崎市の裏（西方）にあたり、33世帯がひっそり暮らす山間の集落である。電照菊（電灯を灯して早期に菊の花を出荷する）の栽培を主としている農村である。



写真コラムー6 山川河内地区の災害状況

提供：川原 孝

巨石が人家まで押し寄せているし、家屋の崩壊もあるのに、なぜ、1人の負傷者も出さなかったか、当時から不思議であった。災害教訓の執筆をきっかけに、再度訪ねることにした。当時の自治会長に、7月23日を振り返ってもらった。

「昔からの言い伝えどおりに避難した。」「崩れる前兆として、山がゆれた。においがした。石垣の水が泥水に変わった。」これを見た自治会長は、皆を集合させ、山の稜線に逃げた。午後6時30分頃であった。まだ

明らなかった。普段から避難場所を決めていたようである。私がみたところ周囲は危険な場所ばかりである。自治会長がいうには、「災害で最も大切なことは、逃げる時機を逸しないことだ。」という答えが返ってきた。なぜ危ないことがわかったのだろうか。それにはこの地区での習慣を知る必要がある。1月にその年の願をかける。不動さん、山の神、馬頭観音、お大師、……など8か所をまわる「願立て」である。8月には、災害、厄病がなかったことの御礼として、「願成就」^{かんじょうじゆ}祭が行われている。ここまでは、災害を蒙ったところでは普通行われる行事である。

しかし、毎月9日（過去の大災害のあった日）には、^{ねんぶつこうまんじゆう}「念仏講 饅頭」を各家庭に持ち回りで配っている。なんと150年間も、それも毎月行われているのである。

33世帯なので、3年ごとに回ってくる。一家総出で作るのである。若者はなぜ饅頭が毎月くるのか、意味が不明であった。ある時期、時代に合わないから中止の声があがった。しかし、このとき古老や自治会の役員たちが、昔の災害の状況をこと細かく聞かせ、理解させている。だから今もって続けていられる。

過去の災害とは、1860年（万延元年）4月9日、圧死者32人、牛馬13頭が同時溺死する大災害があったことである。この時、中島川では、長久橋（眼鏡橋より700m下流）が流失した。このときの豪雨状況に関する文献は見当たらないが、^{もぎ}茂木の^{ぎよくたいじ}玉台寺の過去帳には「三千河内」と書かれている。7ページにわたり死者の名前と年齢が記載されている。平成21年は、150周忌にあたり供養を計画している、とのことである。

災害復旧工事として、ここ山川河内では砂防ダム3基を完成させた。そのうちの1つは、150年前の災害箇所^{にげそこがわ}の逃底川であった。いかにも災害が起りそうな地名・小川である。「ダムが3基も出来て安全であろう」と言う、「この地区では安全なところはない」と言う。

今後の避難は「2基目の砂防ダムから水が出たら逃げる。」とこのことを地区で確認しあっている。

長崎市の過去の豪雨災害

- 1721年(享保6年) 7.28 「享保の大水害」 烽火山から泥水噴出し、長崎市内大洪水。眼鏡橋に流材かかり、38か町浸水の大水害となる。死者46人、石橋(崩流8、損壊7)、流家潰家120棟。
- 1795年(寛政7年) 7.19 「寛政大水害」 彦山・烽火山から泥水噴出し、川筋の水あふれ、床上で4～5尺まで増水。死者5人、家屋流失166棟、全壊39棟、半壊194棟、石橋(ほとんど流失)。

【参考文献】

浄土宗“玉台寺”：「山川河内過去帳」 長崎市茂木町

本文にもあるように、長崎防災都市構想策定委員会での論議を経て、国指定重要文化財「眼鏡橋」は、左右のミニバイパス水路建設によって現在地に保存されることとなった。景観や文化財と防災をどう両立させるかという論議は、当時としては画期的であった。現に後の鹿児島豪雨災害では、鹿児島市を流れる甲突川の5石橋は河川拡幅のため撤去された。長崎市が観光都市であり、中島川と眼鏡橋が主要な観光スポットであることに加え、市民にとって市中心部を流れる中島川が、単に水を安全に流すだけの水路と化していいのかという思いがあったようである。災害から1か月後、まだ行方不明の遺体の捜索が行われていた時に、長崎青年会議所は石橋の復元に備え流失した石橋の石の回収作業を行っている。

しかしこの委員会での激論により眼鏡橋の現地保存が決まったことは、行政関係者にとっては心外であったことが、当時の県の河川課長による次の文章に如実に表れている。「河川管理者としては、委員会において中島川の改修計画が狙上にのせられたこと自体に疑問があったが、眼鏡橋についての議論は当初から決まっていたようなものである。すなわち、衆目を集めた中で開かれる委員会では、大半の意見が文化的で一般受けし、しかも情緒的であるから、と申し上げたら叱責を受けるであろうか」(月刊河川 83・8) 一方で東京大学の高橋裕教授(当時)は、委員会の中間報告について「ここに記された内容は、読む人によって印象は著しく異なるであろうが、かつてない重要な問題点を含んでおり、治水計画の転機を物語るときえ言ってよい」(にほんのかわ 83・3)と記している。

右岸側のバイパスは災害から5年後の昭和62年3月に完成したが、左岸側は店舗が多く代替地のあっせんが難しいことなどから、着工までに長い年月を要した。それでも地道な用地交渉により1軒また1軒と櫛の歯が抜けるように立ち退きながら更地になった川沿いは、狭いスペースながら周囲の住民の手によって季節の花が植えられ、手入れが続けられていた。最終的な用地交渉のめどがついたとして、左岸側バイパス工事着工の説明会が行われたのは平成13年秋。行政にとってはかつて激論を交わして出来上がった計画であるから、やっとここまでこぎつけたとの思いであったろうが、流域住民の一部の反発は強かった。「工事が行われれば交通規制や振動・騒音などで人の流れが変わり、商売は成り立たない」とする周辺商店街との話し合いは1年半に及び、最終的に着工に至ったのは平成15年夏であった。住民の反対は、長引く不況という時代背景も一因であるが、この間用地交渉の対象者以外には何ら説明が行われていなかったことも事実で、現に「右岸バイパスだけで十分で、左岸はもう作らないと思っていた」という住民もいる。着工まで長期間を要する事業については、途中経過を随時説明する必要があることを如実に示している。

中島川の流域にある伊良林小学校は、校区内に奥山地区・鳴滝地区があり、豪雨災害で児童3人と保護者7人が犠牲となった。災害の翌日に予定されていた校内球技大会は10月に延期されて行われ、奇しくもチームメイトの遺影を胸に戦ったチームが優勝、準優勝を勝ち取ったという。

長崎市鳴滝町の土砂災害犠牲者の1人である小学6年生の女子児童の当時の担任は、教師として初めて迎えた夏休みが一生忘れられない夏となったという。「明日から夏休みだから、雑巾全部洗って干しといたよ」廊下の雑巾がけの前で微笑んでいた女子児童の笑顔が今でも心の中に輝いているという。(伊良林小ホタルの会20周年記念誌「飛べよほたる！」)

災害当時伊良林小学校1年生で、長崎市鳴滝町の自宅で土砂災害に遭い、両親と祖父母・妹を亡くした女子児童は、夏休みあけに他県に住むおばの元に引き取られていった。県内にあった両親のお墓も現在居住する県に移している。結婚し子供も生まれ「心配していただいたようなトラウマになっていることもないし、平凡ですが毎日幸せに過ごしています」というものの、災害以来1度もかつて自宅があった場所には足を運んでいないという。

犠牲となった人たちの追悼と、残されたこどもたちの心の支えにと、伊良林小学校ではPTAを中心に災害の翌年ホタルの会を結成した。学校内の飼育室に水槽を設置し、ホタルの幼虫やカワニナの採取、九州各地のホタルの名所や専門家を訪ねての飼育の勉強から始めて、学校の玄関前には地下水を引き人工のホタル川も設けている。ホタルの飼育や川の清掃活動、自然観察は今も続けられている。災害後の河川改修によりコンクリートで固められた川も、平成14年から川床のコンクリートを剥し低水路を掘り込んで、自然石を配置する再整備が始まっている。校内では毎年育てたホタルを鑑賞する催しが開かれ、子供たちは先生や父母・地域の人たちと一緒に小さな命の淡い光を慈しんでいる。中島川上流の御手水川は今では長崎市内でも有数のホタルの飛び交う清流となっていて、いつの日か中島川本川がホタルの名所となる日を関係者は心待ちにしている。

伊良林小学校では大雨などの緊急時の通学路とそれぞれの地域ごとに決められた避難所を確認するための集団下校も梅雨時期に行っていて、川や川の生き物について理解を深める環境教育と合わせて、自然は牙をむくこともあること、その時に自分の身を守るためにはどうすればいいのかという防災教育にも力をいれている。

長崎市民の生活を支える水がめのひとつ、本河内高部水源池の上流の谷沿いに、細長く集落が張り付く奥山地区。上流から見て左手に現在は国道34号日見バイパスが走っていて、集落からはコンクリートの壁を見上げる形になる。「この奥山地区の自然を破壊するのかと道路建設反対のために自治会長を買って出たけど、今ではこの道路がいざと言うときの避難道路として安心感を与えてくれる。それにしてもこの剥き出しのコンクリートはやはりいただけない。植物をはわせるとかやはり景観を考えてもらわないと」。斜面崩壊により12世帯24人が犠牲となった本河内奥山地区。浜下嘉寿雄さんは災害当時から現在まで、自治会長と自主防災組織奥山会の会長を務めている。「あのころは無知だった。雨が降ると川の水位を見には行っても、家の裏の崖を気にしたことはなかった」

災害後、奥山地区など被災地を中心にその地域の積算雨量によって避難準備と避難指示を自動的に呼びかける土石流予警報装置が設置された。土砂災害から身を守るためには早めの避難しかない、そのことを身をもって知った奥山地区の住民は災害後数年間、この土石流予警報装置の指示どおりに度々避難を繰り返した。一人暮らしの高齢者を含め全世帯を避難させるため具体的に誰が誰と車を乗り合わせて逃げるのか、避難訓練も定期的に行った。しかし災害直後に設定された雨量基準で避難を促すこの装置のデータは、河川改修が行われ砂防工事が完成し、災害から22年が過ぎた今も一度も更新されていない。県は2003年秋、県内を14地区に分け地域ごとに新たな警戒・避難基準雨量を設定したが、予算面などから2004年雨季にもまだ土石流予警報装置のデータ更新には至っていないのが現状である。

避難所に落ち着いたかと思うまもなく、また自宅に戻るという体験を繰り返す中で、浜下さんはこれでは住民の身がもたないし、こうしたオオカミ少年状態を繰り返してはいざというときの避難もままならないのではと危惧するようになった。雨が降ると夜中でも裏山や川の状態を見まわり、市から貸与されている簡易雨量計とにらめっこを続ける中で、次第に避難すべきか否かの判断を土石流予警報装置に頼らず、自分自身で判断するようになっていった。「きょうも土石流予警報装置による警報が出てるんですが、避難しなければいけない状況じゃありません」平成14年7月1日奥山地区を訪れていた私に、浜下さんは笑ってこう言った。「おとこの降りはじめから今150ミリを超えたくらいです。150ミリ超えると一応警戒はしますが、今のこの降り方では危ないという感じはしません」20年間この地域を見てきたという自負が、浜下さんに感じられたが、将来浜下さんに代わるリーダーにそれだけの責任を求められるかが課題である。

8月9日の長崎原爆の日を前に、その日長崎県警察本部の当直司令だった堀江邦年さんは、原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列予定の当時の鈴木首相の警備計画を作成していた。通信指令室から長浦川（西彼杵郡琴海町）氾濫の報告を受けて、通信指令室に陣取った。小学生の時、家屋の廃材や家財道具などが住んでいた島原半島の海岸に大量に打ち上げられていたという諫早大水害の記憶があり、漠然とだが水害に対する恐怖のイメージがあった。

「車が流れている」「裏山が崩れている」110番を通じてもたらされていた第三者からの情報が、次第に当事者による実害の情報になり、やがて電話の向こうから悲鳴が聞こえ、明け方になると遺体発見の知らせに変わった。ホットラインを結んでいるタクシーからは次々に浸水状況が知らされ、西彼杵郡時津町・長与町から長崎市の浦上地区・中心部・東長崎地区と雨脚の移り変わりが見て取れた。

壱岐・対馬地方に大雨洪水警報が出された午後2時20分に災害警備連絡室（警備課長以下15人）を立ち上げ、長崎地方に大雨洪水警報が出された午後4時50分に連絡室を警備本部（警備部長以下35人）に、さらに被害拡大の兆しを受け午後7時30分には警備本部体制を警察本部長以下98人に強化した（その後も110番通報の受理体制の強化や災害情報センターの設置などのため警備本部体制は最大164人に）警察の対応は、他の行政機関に比べると早い立ち上がりで市民の評価も高い。それでも長崎県警が内部の参考用に作成した記録集では「“警報慣れ”により災害発生の予測に甘さがあった。“警報慣れ”を打破するため、可能であれば、警報内容にアクセントをつけるか、大雨情報を早めに発表してほしい」と記されていることは、今後の教訓とすべきであろう。

また県警はテレビ・ラジオ局に要請し、長崎市民に対し、低地の住民や通行人は高台へ避難するよう勧告し、避難した5,700人のうち600人は警察本部など警察施設8か所で受け入れた。臨時の避難所となった道場や会議室にはテレビを設置し、被害情報を知らせるとともに、避難者の住所・氏名を確認してマスコミに安否情報として提供した。

堀江さん自身も当日家族となかなか連絡が取れず、一時は安否を真剣に心配した経験から、憂いなく災害警備に従事するためには、自然災害から家族を守る手段と次善策も含め連絡手段を常日頃から確保しておくべきと、以後家庭内での防災に関する対話を大切にしてきたと言う。

長崎豪雨災害に直面して、被災地に位置する長崎大学や長崎総合科学大学では、この豪雨災害の調査に着手した。長崎大学では、豪雨災害の実態の全容を正確に把握するとともに、災害の原因を解明することを目的として、「長崎大学 7.23 長崎豪雨災害学術調査団」を結成した。調査団のメンバーは、工学部 21 人、教育学部 3 人、教養部 3 人、薬学部 1 人の 4 学部 28 人であった。調査内容は、気象、水文、河川災害、土砂災害、道路、橋梁、都市災害、建築構造物、人的被害、災害情報の伝達及び農地災害であった。米軍による昭和 20 年 8 月長崎原爆実態調査報告書が調査の策定に役立った。調査活動は、教職員の自主的な活動によるもので、予算の裏付けはなかった。

災害に対して素人集団である調査団は、夏休みを返上して、教職員及び学生一体となって精力的に現場調査・ヒアリング・資料の収集を行い、調査団内の調査報告会を開催した。調査開始後わずか 3 か月後に「昭和 57 年 7 月長崎豪雨による調査報告書」全 145 頁が刊行された。この報告書は行政、防災機関を始め、各方面に配布された。この報告書は各方面から高い評価を受け、長崎豪雨関係の報告書の中で最も活用され、被災地の復旧・復興のみならず国レベルの防災対策、調査研究にいかされた。特筆すべきは、長崎豪雨災害の報告書は、昭和 58 年度版の防災白書に引用されたことである。

その後も、数年間にわたって、調査結果の解析や実験が継続された。これらより、被災地の復旧や地域固有の課題、継続的な調査は地元の大学でなければ取り組めないことも学んだ。災害研究をリードする他の大学が長崎豪雨災害に関する科学研究費の申請を控え、長崎大学学術調査団に調査研究を任せていただいたことに感謝している。1990 年（平成 2 年）11 月からの雲仙普賢岳の火山災害や 2000 年（平成 12 年）3 月有珠山の噴火の際に地域に位置する大学の研究者が減災、復旧、復興に大きな貢献をしているように、災害研究では地域に位置する大学の研究者の存在は大きい。大学院大学化による研究業績の重視や大学の再編化によって防災の研究を弱体化させてはならない。

長崎豪雨災害の調査団のメンバーは、その後平成 5 年鹿児島水害、平成 9 年鹿児島県出水市土石流災害、平成 2 年から 7 年にかけての雲仙普賢岳の火山災害調査のコアとなっている。平成 7 年阪神・淡路大震災以前は、本州で大きな災害がなかったこともあって、災害調査のノウハウを持っていなかった。長崎豪雨災害の調査経験は、阪神・淡路大震災の土木学会等の災害調査、報告書の作成に活用された。

付 録

文献目録

高橋委員・事務局

1. 報告書

(a) 全般的な報告書

- 1) 日本大学理工学部応用地質学研究室：長崎7月豪雨による土砂崩壊調査報告書，1982.8
- 2) 建設省建築研究所：1982年7月の長崎大洪水調査『速報』，全86頁，1982.8
- 3) 長崎大学学術調査団：昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書，全145頁，1982.11
- 4) 長崎県土木部：7.23長崎大洪水誌，全331頁，1983.1
- 5) 伊勢田哲也：昭和57年7月長崎豪雨による被害，昭和57年度災害科学総合研究，河川分科会シンポジウム，1983.2
- 6) 自然災害科学総合研究班：昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究（長崎を中心とした豪雨災害），自然災害特別研究突発災害研究成果，No.B-57-3，全136頁，1983.3
- 7) 栗林栄一，角徹三，中村俊六，青島縮次郎，河邑真：昭和57年7月長崎豪雨災害調査報告書，全53頁，1983.2
- 8) 日本防災システム協会：長崎豪雨災害の調査報告——昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書（長崎大学学術調査団）より抜粋，防災システム，第6巻，第3号，pp.11-15，1983.5
- 9) 科学技術庁国立防災科学技術センター：1982年7月豪雨（57.7豪雨）による長崎地区災害調査報告，全133頁，1984.3
- 10) 長崎市：長崎市7.23大洪水誌，全391頁，1984.3
- 11) 長崎県：7.23長崎大洪水の記録，全430頁，1984.3
- 12) 京都大学防災研究所防災科学資料センター「特定災害の資料収集・整理」班：自然災害の文献・資料収録（1）昭和57年（1982）長崎豪雨災害，全77頁，1990.3

(b) 特定問題の報告書

- 1) 長崎海洋気象台：災害時気象速報 昭和57年7月23日から25日にかけての梅雨前線による長崎県の大雨〔昭和57年7月豪雨〕，全17頁，1982.7
- 2) 九州地方建設局：昭和57年7月豪雨による出水の概要，全35頁，1982.8
- 3) 福岡管区気象台：昭和57年7月23日から25日にかけての梅雨前線による九州及び山口県地方の大雨，災害時自然現象報告書，第11号，全56頁，1982.8
- 4) 気象衛星センター：昭和57年7月豪雨気象衛星資料集，気象衛星センター技術報告別冊，全56頁，1982.9
- 5) 長崎県土木部：長崎大洪水意識調査業務報告——長崎大洪水を体験されて——（概要版），全16頁，1982.9
- 6) 長崎県土木部：長崎大洪水意識調査業務報告——長崎大洪水を体験されて——，全191頁，1982.9
- 7) （株）応用地質調査事務所：昭和57年7月豪雨による長崎市周辺の被害調査報告書，全60頁，1982.9
- 8) NHK長崎放送局：長崎水害の記録，全61頁，1982.10
- 9) 長崎行政監察局：昭57.7.23長崎大洪水調査結果報告書，全62頁，1982.11
- 10) 長崎県（生活福祉部生活課）：長崎大洪水における生活必需物資の安定供給確保等に関する調査（昭和57年度経済企画庁委託調査），全243頁，1983.3
- 11) 日本気象協会：水資源有効利用のためのダムに対する水予測プログラムの開発研究報告書（梅雨前線による降雨予測——長崎豪雨の再現予測），全54頁，1983.3
- 12) 建設省都市局都市防災対策室：昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査報告書——長崎市における都市形成と災害に関する調査——，全100頁，1983.3

- 13) 長崎県農林部：7.23長崎大水害農林災害の記録，全93頁，1983.3
- 14) 長崎市都市計画課：長崎市防災都市計画策定調査報告書，全175頁，1983.3
- 15) 建設省：昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査報告書，全39頁，1983.3
- 16) 林野庁：昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査——報告書——，全57頁，1983.3
- 17) 自治省消防庁：昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査報告書，全121頁，1983.3
- 18) 科学技術庁資源調査所：昭和57年7月豪雨および同年の台風10号に伴う水害が残した教訓——長崎市および三重県中西部被災地の現場調査を通して——，全128頁，1983.3
- 19) 建設省土木研究所：昭和57年7月長崎豪雨災害調査概要，全296頁，1983.3
- 20) 長崎市都市計画課・国際航業株式会社：7.23長崎豪雨被災復旧状況調査報告書，全133頁，1983.3
- 21) 建設省土木研究所総合治水研究室：土木研究所資料 治水研究(4)水災罹災者の救済措置と総合治水性——昭和57年7月長崎豪雨による災害事例を通して——，全81頁，1983.3
- 22) 建設省傾斜地保全課土木研究所地すべり研究室：土木研究所資料 昭和57年梅雨前線台風による地すべり災害(長崎県，熊本県，奈良県)現地調査報告書，全77頁，1983.3
- 23) 東京都トラック協会緊急輸送システム検討小委員会：7.23長崎大水害輸送関係調査報告，全43頁，1983.3
- 24) 長崎総合科学大学環境科学研究所：環境論叢，No.8——1982.7.23長崎豪雨災害特集——，全109頁，1983.3
- 25) 長崎県土木部：長崎防災都市構想策定調査報告書，全147頁，1983.3
- 26) 東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班：1982年7月長崎水害における組織の対応——情報伝達を中心として——，全209頁，1983.6
- 27) 建設省土木研究所砂防部砂防研究室：土木研究所資料 長崎豪雨時の気象情報の解析と土砂災害防止のための気象情報収集システムの検討，全94頁，1983.10
- 28) 財団法人 新住宅普及会住宅建築研究所(片寄俊秀代表)：斜面住宅および住環境の研究，全67頁，1983.10
- 29) 長崎県長崎土木事務所：57.7.23長崎大水害におけるがけ崩れについて，全61頁，1983.10
- 30) 建設省：昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査報告書，全58頁，1984.3
- 31) 観光資源保護財団：長崎・中島川と石橋群・その2，全97頁，1984.3
- 32) 林野庁：昭和57年7月及び8月豪雨災害対策調査——報告書——，全95頁，1984.3
- 33) 建設省土木研究所砂防部砂防研究室：土木研究所資料 昭和57年7月長崎豪雨による土砂災害調査報告書，全146頁，1984.3
- 34) 科学技術庁研究調整局：昭和57年7月長崎豪雨災害に関する緊急研究報告書，全137頁，1984.3
- 35) 東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班：1982年7月長崎水害における住民の対応，全187頁，1984.3
- 36) 気象庁：昭和57年7月豪雨調査報告(福岡管区気象台)，気象庁技術報告，第105号，全167頁，1984.3
- 37) 日本気象協会：水資源有効利用のためのダムに対する水文予測プログラムの開発研究報告書(集中豪雨の予測法の開発——長崎豪雨，浜田豪雨の解析)，全80頁，1984.3
- 38) 文化財建造物保存技術協会：重要文化財眼鏡橋保存修理報告書(災害復旧)，全99頁，1984.3
- 39) 長崎県土木部：長崎防災都市構想策定調査報告書，全118頁，1984.3
- 40) 長崎県土木部：長崎防災都市構想策定調査報告書(資料編)，全137頁，1984.3
- 41) 昭和59年度長崎大学公開講座：豪雨災害と防災，全63頁，1984.6
- 42) 長崎県地学会：7.23長崎豪雨災害特集号，全106頁，1984.6
- 43) 財団法人日本住宅総合センター：中高層共同住宅管理問題に関する調査研究——都市型水害対策について——，全164頁，1984.8
- 44) 建設省土木研究所地震防災部耐震研究室：土木研究所資料 昭和57年7月長崎大水害における道路の被害および復旧体制，全49頁，1985.1
- 45) 長崎県土木部砂防室：昭和57年7月23日長崎豪雨による土砂災害(砂防等激甚災害事業の概要)，全94頁，1985.2
- 46) 建設省九州地方建設局：昭和59年度傾斜状市街地における総合防災対策調査——研究会資料——，1985.3
- 47) 野口正人：豪雨災害時における都市部低平地の耐水性の評価並びに防災情報の整備に関する研究，昭和62年度文部

省科学研究費補助金研究成果報告, 全 71 頁, 1985

- 48) 長崎県土木部: 都市計画総合防災対策調査報告書 (再開発), 全 183 頁, 1985.3
- 49) 建設省九州地方建設局長崎工事事務所・長崎県土木部都市計画課: 長崎地区防災道路網計画調査, 長崎防災道路ネットワーク調査概要報告書, 全 36 頁, 1985.3
- 50) 長崎県土木部: 都市計画総合防災対策調査報告書 (避難地, 避難路) —— 概要版 ——, 全 85 頁, 1985.4
- 51) 廣井脩: 災害の及ぼす社会的影響, 文部省科学研究費自然災害特別研究成果, 全 190 頁, 1986
- 52) 長崎県土木部: 都市計画総合防災対策調査報告書, 全 158 頁, 1986.3
- 53) 高橋和雄, 高橋裕, 池田虎彦: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による自動車水害の調査報告書, 全 54 頁, 1986.6
- 54) 武田喬男: 降雨災害をもたらす豪雨の集中度に関する研究, 文部省科学研究費自然災害特別研究成果, No. A-61-3, 全 149 頁, 1987.2
- 55) 長崎市土木部道路維持課: 中島川石橋群橋梁災害復旧工事, 全 136 頁, 1987.3
- 56) 長崎県土木部: 都市計画総合防災対策調査 (防災公園及び集団移転) 報告書, 全 80 頁, 1987.3
- 57) 長崎県警察本部: 7.23 長崎大水害と警察活動, 全 122 頁, 1987.11
- 58) 建設省九州地方建設局長崎工事事務所: 長崎大水害における一般国道 34 号の災害と復旧の記録, 全 153 頁, 1990.3
- 59) 長崎大学自然災害科学社会の防災研究グループ: 長崎県の豪雨災害と自治会・自主防災組織の防災力, 全 154 頁, 1990.3
- 60) 浅井富雄: 集中豪雨のメカニズムと予測に関する研究, 文部省科学研究費重点領域研究「自然災害の予測と防災力」研究成果, 全 458 頁, 1990.3
- 61) 長崎大学「社会の防災力研究グループ」: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨災害に関する文献目録, 全 20 頁, 1991.3
- 62) 長崎大学教育学部地学教室: 長崎豪雨の 10 年——気象分野に関する調査報告書——, 全 170 頁, 1992.6
- 63) 高橋和雄: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨災害に関する文献目録 (第 3 版), 全 22 頁, 1993.2
- 64) 長崎県: 57.7.23 長崎大水害 災害復興 10 年誌, 全 137 頁, 1993.3
- 65) 片寄俊秀: 論集 1982——1992. 長崎豪雨災害と都市の再生, 全 288 頁, 1993.7
- 66) 高橋和雄: 長崎豪雨災害 10 年にみる防災力の現状と課題に関する調査報告書, 全 216 頁, 1994.2

(c) 写真集・単行本

- 1) 朝日航洋 (株): 長崎災害航空写真, 1982.7
- 2) (株) ナガサキフォトサービス: 長崎水害写真, 1982.7
- 3) 西日本新聞社: 7.23 長崎大水害報道写真集, 全 80 頁, 1982.9
- 4) 長崎新聞社: 写真集 7.23 長崎大水害, 全 128 頁, 1982.11
- 5) 長崎県長与町: 187 ミリの脅威長崎大水害記録集, 全 64 頁, 1983.3
- 6) (株) ナガサキフォトサービス: 長崎大水害記録写真集, 全 36 頁
- 7) 河口栄二: 濁流——雨に消えた 299 人, 講談社, 全 302 頁, 1985.3
- 8) 高橋和雄, 高橋裕: クルマ社会と水害——長崎豪雨災害は訴える——, 九州大学出版会, 全 182 頁, 1987.12
- 9) 記念誌編集会: 7.23 長崎大水害・国道 34 号復旧奮戦記 精霊船が駆け抜けた, 長崎文献社, 全 211 頁, 2002.7

(d) 各機関の水害記録

- 1) 長崎電気軌道株式会社: 7.23 長崎大水害奮戦記, 全 15 頁, 1982
- 2) 長崎電気軌道株式会社電車部: 57.7.23 長崎大水害営業線留置車両動静調附営業線車両留置についての総括, 全 23 頁, 1982
- 3) 長崎電気軌道株式会社電車部: 7.23 長崎大水害記録附 204 号落雷事故顛末, 全 19 頁, 1982
- 4) 西部ガス (株) 総務部広報: さいぶ激じん! 長崎大水害——ガス供給再開まで——, 全 27 頁, 1982
- 5) 長崎市医師会: 長崎医師会報=7.23 長崎大水害特集号=, 全 86 頁, 1982.11
- 6) 長崎県職長崎支部「鰐」編集委員会: 鰐 No.3——7.23 長崎大水害——, 全 92 頁, 1982.11
- 7) 長崎県警察本部: 7.23 長崎大水害, 警鼓, 10, 11 月合併号, pp.1-150, 1982.11

- 8) 民放労働長崎放送労働組合：ドキュメント「7.23長崎大水害」放送，全105頁，1982.12
- 9) 西部ガス(株)：長崎大水害と都市ガス復旧の記録，全110頁，1983
- 10) 長崎市民病院：あの日あの時——7.23長崎大水害——，全64頁，1983
- 11) 中島川復興委員会・日本リアリズム写真集団長崎支部：長崎の母なる川 中島川と石橋群，1983
- 12) 九州電気通信局保全局：昭和57年災害の記録と教訓，全185頁，1987
- 13) 思案橋ガス灯通り商店街：10周年記念誌，全33頁，1993.8

2. 論文・技術雑誌

(a) 気象

- 1) 山形英雄：梅雨前線による長崎県の大雨，気象，9月号(No.305)，pp.16-17，1982.9
- 2) 山形英雄：梅雨前線による長崎県の大雨(第2報)，気象，11号(No.307)，pp.10-113，1982.11
- 3) 荒生公雄：「気象」昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団)，pp.2-13，1982.11
- 4) 坂上務，元田雄四郎，小島隆義，早川誠而：昭和57年7月豪雨災害，九州の農業気象，第19号，pp.72-73，1982.11
- 5) 立平良三：長崎豪雨と警報——注意報・警報のあり方——，気象，1月号(No.309)，pp.8-11，1983.1
- 6) 坂上務，元田雄四郎，早川誠而，林静夫，中島暢太郎，後町幸雄，小島隆義：「豪雨の集中度に関する調査研究」自然災害特別研究突発災害研究成果，No.B-57-3，昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究，pp.5-29，1983.3
- 7) 後町幸雄，中島暢太郎，元田雄四郎：昭和57年7月豪雨について，京都大学防災研究所年報，第26号B-2，pp.93-108，1983.4
- 8) 小倉義光：集中豪雨とたつまぎ，科学，Vol.53，pp.169-176，1983.3
- 9) 二宮洗三：豪雨の数値予報，科学，Vol.53，pp.335-337，1983.3
- 10) 長浜宗政：昭和57年7月23日の長崎豪雨の解析，電力と気象，Vol.28，pp.43-54，1984.1
- 11) 荒生公雄，宮崎義生：長崎豪雨における10分間降水量の分布，長崎大学教育学部自然科学研究報告，第35号，pp.34-44，1984.3
- 12) 小倉義光：中規模対流系と梅雨期の大雨(一般気象学)，東大出版会，pp.218-228，1984.5
- 13) 荒生公雄：長崎豪雨の降雨特性，長崎県地学会誌，第39・40号(合併号)，pp.25-31，1984.6
- 14) 荒生公雄，扇要子：豪雨防災教育の課題と展望，長崎県地学会誌，No.39・40，pp.60-63，1984.6
- 15) Ninomiya, K., Koga, H., Yamagishi, Y. and Tatsumi, Y. : Prediction Experiment of Extremely Intense Rainstorm by a Very - Fine Mesh Primitive Equation Model, J. Meteor. Soc. Japan, Vol.62, No.2, pp.273-295, 1984
- 16) 長谷川隆司，二宮洗三：静止気象衛星データからみた長崎豪雨(1982年7月)の特徴，天気，第31巻，第9号，pp.35-42，1984
- 17) 荒生公雄，金子圭一：九州地方における梅雨期豪雨の地域特性，長崎大学教育学部自然科学研究報告，第36号，pp.17-24，1985.3
- 18) Ogura, Y., Asai, T. and Dohi, K. : A Case of a Heavy Precipitation Event along the Baiu Front in Northern Kyushu. 23 July 1982 : Nagasaki Heavy Rainfall, J. Meteor. Soc. Japan, Vol.63, No.5, pp.883-900, 1985
- 19) 荒生公雄：10分間降水量でみた長崎豪雨の構造，天気，第33巻，第1号，pp.17-26，1986.1
- 20) 荒生公雄：長崎豪雨に基づく強雨の10分間雨量分布モデル，天気，第33巻，第6号，pp.21-24，1986.6
- 21) 荒生公雄：長崎豪雨の構造と防災対策，月刊消防3月号，pp.1-8，1987.3
- 22) 荒生公雄：長崎豪雨時における大瀬戸町幸物の短時間雨量，長崎大学教育学部自然科学研究報告，第38号，pp.15-21，1987
- 23) 松長高雄：赤外データの画素単位でみた長崎豪雨の構造，天気，第34巻，第6号，pp.29-40，1987
- 24) 荒生公雄：長崎県における豪雨災害の特徴，長崎県の豪雨災害と自治会・自主防災組織の防災力，第2章，pp.3-37，1990

(b) 河川

- 1) 野口正人, 中村武弘:「水文現象としての長崎豪雨」昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.15-17, 1982.11
- 2) 野口正人, 中村武弘, 平山康志, 武田篤:「長崎市街地の河川氾濫」——浦上川・中島川 昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.18-27, 1982.11
- 3) 古本勝弘, 武政剛弘, 薦田広章, 一ノ瀬和雄:「八郎川水系の河川災害」昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.28-35, 1982.11
- 4) 建設省河川局防災課:昭和57年発生災害の概況, 河川, 437号, pp.13-18, 1982.12
- 5) 古本勝弘, 武政剛弘, 薦田広章, 一ノ瀬和雄, 平野宗夫:「八郎川の河川災害」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.80-87, 1983.3
- 6) 野口正人, 中村武弘:「浦上川の河川災害」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.88-93, 1983.3
- 7) 高橋保, 大久保賢治, 中川一:「中島川の洪水氾濫」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.94-104, 1983.3
- 8) 布袋厚, 長崎北高等学校地学部, 長崎西高等学校地学部:長崎豪雨災害による城山・浦上地区の浸水被害, 環境論叢, No.8, pp.59-64, 1983.3
- 9) 高橋保, 大久保賢治, 中川一:昭和57年長崎豪雨における中島川の洪水氾濫解析, 京都大学防災研究所年報, 第26号B-2, pp.109-126, 1983.4
- 10) 久保木光熙:集中豪雨に対処する——長崎豪雨の教訓から——, 河川, 443号, pp.24-29, 1983.6
- 11) 小鳥井清:7.23長崎大水害で今日想うこと, 河川, 445号, pp.23-31, 1983.8
- 12) 山川正史:57年豪雨による長崎市水道事業の被害とその復旧の経過, 水道協会雑誌, 第54巻, 第6号(第609号), pp.13-24, 1983
- 13) 高橋保, 中川一, 加納茂紀:市街地における洪水氾濫と土砂堆積に関する研究, 京都大学防災研究所年報, 第27号B-2, pp.497-511, 1984.4
- 14) 友杉邦雄:面積雨量の推算値の信頼性に関する研究——長崎豪雨における雨量の空間的変動性と可能誤差の特性——, 京都大学防災研究所年報, 第27号B-2, pp.221-232, 1984.4
- 15) 野口正人, 米倉広幸, 菅浩一:水文資料が乏しい地域での流出解析, 長崎大学工学部研究報告, 第15巻, 第24号, pp.89-94, 1985.1
- 16) 野口正人, 米倉広幸, 菅浩一:水文資料が乏しい地域における流出解析法, 第29回水理講演会論文集, pp.233-238, 1985.2
- 17) 野口正人, 米倉広幸, 森尾宣紀:浸透量を考慮した流出解析法ならびにその応用に関する研究, 昭和57年長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究(長崎大学工学部土木工学科), pp.9-19, 1985.3
- 18) 野口正人, 中村武弘, 秀徳典穂, 小中俊二:氾濫解析と河川管理, 昭和57年長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究(長崎大学工学部土木工学科), pp.20-30, 1985.3
- 19) 薦田広章, 古本勝弘, 武政剛弘, 一ノ瀬和雄:小河川の河川改修に伴う流出特性の変化, 昭和57年長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究(長崎大学工学部土木工学科), pp.31-37, 1985.3
- 20) 野口正人, 米倉広幸, 森尾宣紀:強雨時における土中浸透量の評価に関する研究, 第30回水理講演会論文集, pp.109-114, 1986.2
- 21) Iwasa, Y., K. Inoue, M. Noguchi and T. Nakamura: Simulation of Flush Flows due to Heavy Rainfalls in Nagasaki, Urban Drainage Modelling (Edited by Maksimovic, C. and H. Radojkovic), Pergamon Press, pp.137-147, 1986.4
- 22) Iwasa, Y., M. Noguchi and T. Nakamura: Simulation of Urban Storm Drainage Involving River and Overland Flows, Proc. 22nd IAHR Congress, Part D, pp.208-213, 1987.8
- 23) Iwasa, Y., M. Noguchi and T. Nakamura: Simulation Analysis of Urban Storm Drainage, Journal of Natural Disaster Science, Vol.10, No.2, pp.35-46, 1987

- 24) Noguchi, M. and T. Nakamura : Effect of Boundary Condition on the Computation of Urban Storm Drainage, Proc. 6th Congress of APD-IAHR, Vol. II-2, pp.707-713, 1988
- 25) 野口正人, 米倉広幸 : 地表条件の違いに応じた土中浸透量の評価, 第32回水理講演会論文集, pp.77-82, 1988.3

(c) 土砂・道路

- 1) 近森藤夫 : 水害と緑・長崎水害をみて, グリーンエイジ, pp.7-10, 1982.9
- 2) 藤田壽雄, 渡辺正幸, 久楽勝行, 仲野公章 : 昭和57年7月長崎集中豪雨について, 土と基礎, 30巻, 9号, pp.96-97, 1982.9
- 3) 渡辺正幸, 山本晃一, 吉松弘行, 水山高久, 仲野公章, 佐合純造 : 長崎57.7豪雨災害調査概報, 土木技術資料, Vol.24, No.10, pp.51-57, 1982.10
- 4) 鎌田泰彦, 松岡数充, 近藤寛 : 「地質条件からみた災害特性」, 昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.37-52, 1982.11
- 5) 伊藤秀三, 中西弘樹 : 「斜面崩壊と植生」, 昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.53-58, 1982.11
- 6) 伊勢田哲也, 落合英俊, 棚橋由彦 : 「土砂崩壊の実態と降雨特性との関係」, 昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.59-71, 1982.11
- 7) 伊勢田哲也, 落合英俊, 棚橋由彦 : 「道路」, 昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp.73-78, 1982.11
- 8) 大八木規夫 : 昭和57年7月23日の長崎県下の大雨による災害, 防災科学技術, No.47, pp.1-8, 1982.12
- 9) 磯部一洋, 巖谷敏光 : 57年7月長崎豪雨災害——特に山地崩壊について——, 地質ニュース, No.342, pp.6-12, 1983.2
- 10) 伊勢田哲也, 落合英俊, 棚橋由彦 : 「長崎豪雨による土砂災害」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.30-40, 1983.3
- 11) 鎌田泰彦, 近藤寛, 山崎達雄, 松本徂夫, 松岡数充 : 「長崎豪雨における地盤災害の地質的特性」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.41-53, 1983.3
- 12) 山内豊聡, 巻内勝彦, 林重徳, 中島通夫 : 「長崎豪雨による道路斜面災害」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.60-66, 1983.3
- 13) 柴田徹, 高橋保, 江頭進治, 澤井健二, 砂坂善雄 : 「崩壊・土石流と土砂害危険度評価について」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No.B-57-3, 昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究, pp.71-79, 1983.3
- 14) 駒村富士弥 : 豪雨による表層崩壊発生の一事例——昭和57年7月長崎豪雨の場合——文部省科学研究費自然災害特別研究成果「豪雨による表層崩壊の発生に関する研究」(別刷), pp.1-16, 1983.3
- 15) 伊藤秀三 : 豪雨災害の中でみたもの——長崎豪雨災害にみる斜面崩壊地と植生——, グリーンエイジ, pp.36-39, グラビア3, 1983.3
- 16) 針貝武紀 : 国道34号災害復旧工事——7.23長崎大水害の事例をふり返る——, 土木技術, Vol.38, No.7, pp.36-45, 1983.7
- 17) 後藤恵之輔 : ランドサット・データによる昭和57年7月豪雨災害の調査, 長崎大学工学部研究報告, 第13巻, 第21号, pp.225-234, 1983.8
- 18) 棚橋由彦 : 昭和57年長崎豪雨による土砂災害について, 昭和58年度土木学会西部支部夏季講習会テキスト, pp.83-110, 1983.8
- 19) 伊勢田哲也 : 長崎豪雨災害に思うこと, 土と基礎, Vol.31, No.9, pp.1-3, 1983.9
- 20) 山本茂樹, 針貝武紀, 中垣光弘 : 1982.7.23長崎大水害をふり返って, 道路, No.521, pp.46-53, 1983.10
- 21) 中垣光弘 : 長崎大水害における国道34号の災害と復旧, 土木施工, Vol.24, No.14, pp.233-242, 1983.11
- 22) 鎌田泰彦, 近藤寛 : 昭和57年7月長崎豪雨による都市地質災害, 地質学論文集第23号, pp.167-185, 1983.12
- 23) 宇根寛 : 長崎市周辺の斜面崩壊について——1万分の1土地条件図をもとにして——, 地図, Vol.21, No.4, pp.21-28, 1983

- 24) 宇根寛：斜面崩壊と土地条件，第12回国土地理院技術研究発表会資料（国土地理院技術資料A1-No.122），pp.83-97，1983
- 25) 鎌田泰彦，近藤寛，松岡数充：昭和57年7.23長崎大水害（口絵），地質ニュース，342号，pp.1-4，（写真1-9），1983
- 26) 磯部一洋，巖谷敏光：57年7月長崎豪雨災害——特に山地崩壊について——，地質ニュース，342号，pp.6-12，1983
- 27) 保里川振一郎：7.23をふりかえって，道，pp.16-20，1983
- 28) 伊勢田哲也，落合英俊，棚橋由彦，川内俊英：昭和57年長崎豪雨における土石流災害に関する一考察，長崎大学工学部研究報告，第14巻，第22号，pp.59-69，1984.1
- 29) 伊勢田哲也，川内俊英，棚橋由彦：数量化理論を用いた土石流災害に関する統計学的考察，長崎大学工学部研究報告，第14巻，第22号，pp.71-79，1984.1
- 30) 栃木省二：豪雨と土砂災害，電力と気象，Vol.28，pp.109-115，1984.1
- 31) 伊勢田哲也，棚橋由彦：「長崎豪雨における緩斜面の崩壊機構」，災害資料の収集とその解析による自然災害事象の研究成果報告，pp.77-78，1984.3
- 32) 鎌田泰彦：昭和57年7月長崎豪雨災害の概要と地質学的背景，長崎県地学会誌，第39・40号（合併号），pp.17-24，1984.6
- 33) 松岡数充：過去にあった集中豪雨——堆積物に残された記録（瀬古地区及び浦上地区）——，長崎県地学会誌，第39・40号（合併号），pp.32-35，1984.6
- 34) 近藤寛：長崎豪雨における浦上川，中島川の氾濫による堆積物，長崎県地学会誌，第39・40号（合併号），pp.36-40，1984.6
- 35) 西村利彌，高塚辰司，橋本明：土石流発生と降雨について（警戒避難についての一考察），長崎県地学会誌，第39・40号（合併号），pp.41-45，1984.6
- 36) 藤本陸：昭和57年7月豪雨により大瀬戸町塚堂及び東浜において発生した地すべり，長崎県地学会誌，第39・40号（合併号），pp.46-52，1984.6
- 37) 瀬尾克美，水山高久，石膳英彦，北山滋基：土石流災害の事例調査——昭和57年長崎豪雨災害より——，土木技術資料，Vol.26，No.8，pp.33-38，1984.8
- 38) 伊藤秀三：森林と豪雨災害，森林，No.10，pp.37-39，1984
- 39) 武政剛弘，伊勢田哲也，一ノ瀬和雄：実験による雨水の浸透に関する一考察，昭和57年7月長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究（長崎大学工学部土木工学科），pp.39-48，1985.3
- 40) 伊勢田哲也，棚橋由彦：長崎豪雨時における斜面の崩壊機構，昭和57年7月長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究（長崎大学工学部土木工学科），pp.49-60，1985.3
- 41) 後藤恵之輔，棚橋由彦，福嶋晃二郎，古野徹：斜面崩壊の危険度評価におけるランドサットデータの適用，昭和57年7月長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究（長崎大学工学部土木工学科），pp.61-66，1985.3
- 42) 棚橋由彦，伊勢田哲也，持下輝雄：土石流の事例解析と発生予測法の一試案について，昭和57年7月長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究（長崎大学工学部土木工学科），pp.67-78，1985.3
- 43) 伊勢田哲也，棚橋由彦，山本芳裕：長崎豪雨における緩斜面の崩壊機構，土質工学会論文報告集，第25巻，第2号，1985.4
- 44) 森下信行，川原孝：長崎災害被災地とその後の復旧状況，土木施工，26巻，7号，pp.20-26，1985.6
- 45) 高橋保，中川一：豪雨性表層崩壊の発生とその生産土量の予測，第30回水理講演会論文集，pp.199-204，1986.2
- 46) Iseda, T. and Tanabashi, Y. : Mechanism of slope failure during heavy rainfall in Nagasaki July 1982, Natural Disaster Science, Vol.8, No.1, pp.55-84, 1986
- 47) 樗木武，平田登喜男，藤本繁雄：昭和57年長崎豪雨の土石流調査と分析，九州大学工学集報，第60巻，第1号，pp.17-24，1987.1
- 48) 大八木規夫：長崎の集中豪雨禍を振り返って，地理，第28巻，第5号，pp.78-85，1988
- 49) 棚橋由彦，後藤恵之輔，杉山和一：土石流の事例解析と発生予測法の一試案，新砂防，Vol.41，No.5，pp.3-13，1989
- 50) 平田登喜男，樗木武，藤本繁雄，村田重之：昭和57年長崎豪雨の土石流災害の実態調査と危険度予測法の一提案，

(d) 農林災害

- 1) 池永敏彦:「農地災害」, 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp. 139-143, 1982. 11
- 2) 武政剛弘, 古本勝弘, 薦田広章, 一ノ瀬和雄: 57 年 7 月豪雨による農林被害の分析——7.23 長崎水害——, 九州の農業気象, 第 19 号, pp. 1-6, 1982. 11
- 3) 竹下敬司: 長崎豪雨における崩壊概況と森林, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No. B-57-3, 昭和 57 年 7 月豪雨災害に関する調査研究, pp. 54-56, 1983. 3
- 4) 坂上務, 元田雄四郎, 林静雄, 武政剛弘:「長崎豪雨に伴う農林災害」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No. B-57-3, 昭和 57 年 7 月豪雨災害に関する調査研究, pp. 57-59, 1983. 3
- 5) 田中宏平, 中村洋司: 57 年長崎・熊本豪雨災害の概要, 農業土木学会誌, 第 51 巻, 第 8 号, pp. 5-12, 1983. 8
- 6) 太田弘毅: 57 年長崎・熊本豪雨災害時の気象状況, 農業土木学会誌, 第 51 巻, 第 8 号, pp. 13-18, 1983. 8
- 7) 川口徳忠: 57 年長崎・熊本豪雨災害の被害の事例と要因, 農業土木学会誌, 第 51 巻, 第 8 号, pp. 19-24, 1983. 8
- 8) 田中宏平, 宮島敏光: 57 年長崎・熊本豪雨災害の復旧工法について, 農業土木学会誌, 第 51 巻, 第 8 号, pp. 25-32, 1983. 8

(e) 住宅・構造物の災害

- 1) 小西保則:「橋梁」, 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp. 79-90, 1982. 11
- 2) 小森清司, 末岡禎佑, 崎山毅, 福地信義, 蓼原真一: 建築構造物の被害, 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による災害の調査報告書(長崎大学学術調査団), pp. 111-124, 1982. 11
- 3) 石野治, 白砂剛二, 片寄俊秀, 宮原和明, 鮫島和夫, 村田明久, 小森清司, 蓼原真一: '82 長崎豪雨災害調査報告, 建築雑誌, Vol. 98, No. 1202, pp. 82-87, 1983. 1
- 4) 小山田了三: 長崎大水害と石橋群(上), 橋梁, Vol. 19, No. 1, pp. 36-43, 1983. 1
- 5) 小山田了三: 長崎大水害と石橋群(下), 橋梁, Vol. 19, No. 2, pp. 34-41, 1983. 2
- 6) 小西保則:「橋梁の被害」, 自然災害特別研究突発災害研究成果, No. B-57-3, 昭和 57 年 7 月豪雨災害に関する調査研究, pp. 112-116, 1983. 3
- 7) 鮫島和夫, 沖元勝治, 小柳剛, 砂本浩良, 四元勝郎, 影山貴子: 激甚被災地域・東長崎の被災調査と再生計画への提言, 環境論叢, No. 8, pp. 23-48, 1983. 3
- 8) 村田明久: 長崎豪雨災害による都心部の被害, 環境論叢, No. 8, pp. 49-53, 1983. 3
- 9) 白砂剛二: 長崎豪雨災害による建築物の被害(その 1), 環境論叢, No. 8, pp. 65-71, 1983. 3
- 10) 宮原和明: 長崎豪雨災害による建築物の被害(その 2), 環境論叢, No. 8, pp. 72-77, 1983. 3
- 11) 林一馬: 眼鏡橋創架の時期とその周辺——長崎の水災史と石橋群に関する研究(上)——, 長崎総合科学大学紀要, 24 巻, 2 号, pp. 187-216, 1983
- 12) 林一馬: 眼鏡橋創架の時期とその周辺——長崎の水災史と石橋群に関する研究(中)——, 長崎総合科学大学紀要, 24 巻, 2 号, pp. 217-238, 1983
- 13) 林一馬: 眼鏡橋創架の時期とその周辺——長崎の水災史と石橋群に関する研究(下の 1)——, 長崎総合科学大学紀要, 25 巻, 1 号, pp. 1-36, 1984
- 14) 高橋和雄, 伊勢田哲也, 吉次俊博: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による建物付属設備の被害と復旧, 自然災害科学, 6-1, pp. 24-37, 1987. 3
- 15) Yasunori Konishi: Experimental study on effect of stone arch bridge on flood flow and its stability against flood pressure, Proc. of JSCE, No. 380/I-7, pp. 87-97, 1987. 4
- 16) 南嘉樹: 建築改善および適切な建築配置による都市の水害防災性向上手法に関する調査研究, 長崎総合科学大学紀要, 第 29 巻, 第 1 号, pp. 155-162, 1988. 6

(f) 都市災害

- 1) 片寄俊秀：長崎豪雨災害と都市再生の課題，公害研究，Vol.12，No.2，1982.10
- 2) 高橋和雄，岡林隆敏：「都市災害」，昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査醸告書（長崎大学学術調査団），pp.91-110，1982.11
- 3) 藤田憲：長崎豪雨と都市再建，新都市，第36巻，第12号，pp.48-53，1982.12
- 4) 石野治，白砂剛二，片寄俊秀，宮原和明，鮫島和夫，村田明久，小森清司，蓼原真一：'82 長崎豪雨災害調査報告，建築雑誌，Vol.98，No.1202，pp.82-87，1983.1
- 5) 片寄俊秀：長崎豪雨災害と都市の再生の課題，環境論叢，No.8，pp.9-22，1983.3
- 6) 高橋和雄：「都市災害」，自然災害特別研究突発災害研究成果，No.B-57-3，昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究，pp.117-120，1983.3
- 7) 市川信愛：都市災害と流通・消費関係，経営と経済，63巻，1号，1983.6
- 8) 片寄俊秀：その後の長崎にみる都市水害の様相，河川レビュー，Vol.12，No.4，1983
- 9) 片寄俊秀：都市災害問題と住宅問題，都市問題研究，35巻，8号，pp.34-46，1983
- 10) 片寄俊秀：長崎水害の教訓，森林・緑と水を守る九州討論集会，pp.25-60，1984.1
- 11) 片寄俊秀：長崎豪雨災害その後，地理，29巻，6号，pp.29-37，1984.2
- 12) 岩永忠康：災害に備えての購買行動等に関する調査——7.23長崎豪雨災害を体験して——，地域論叢，No.1，pp.31-44，1984.3
- 13) 観光資源保護財団：長崎・中島川と石橋群 その2，pp.12-97，1984.3
- 14) 片寄俊秀：'82長崎豪雨災害その後，日本の科学者，Vol.19，No.2，pp.17-24，1984
- 15) 市川信愛：都市災害と小売商業機能，日本都市学会年報，Vol.17，pp.30-48，1984
- 16) 河地貫一：新長崎都市論——7.23長崎豪雨災害の都市地理学的考察——，日本都市学会年報，Vol.17，pp.84-102，1984
- 17) 片寄俊秀，鮫島和夫，村田明久：長崎豪雨災害に関する都市工学的考察，日本都市学会年報，Vol.17，pp.103-117，1984
- 18) 高橋和雄，池田虎彦：昭和57年7月長崎豪雨による自動車の被害と防災対策，土木学会論文集，第353号/IV-2（報告），pp.149-158，1985.1
- 19) 片寄俊秀：長崎豪雨災害1982その後—長崎災害と復興都市計画をめぐって—，都市計画，135，pp.62-68，1985.5
- 20) 高橋和雄：昭和57年7月長崎豪雨における都市災害，昭和60年度土木学会西部支部夏期講習会テキスト，pp.27-40，1985.8
- 21) 片寄俊秀，布袋厚，南嘉樹：災害その後に関する研究——長崎豪雨災害（1982）その後における都市復興過程をめぐって——（その1），長崎総合科学大学紀要，第26巻，第2号，pp.89-102，1985.11
- 22) 高橋和雄：昭和57年7月長崎豪雨時の路線バスの運転手の行動・判断，自然災害科学，Vol.4，No.2，pp.56-68，1985
- 23) 九州経済調査会：福岡地方における水害情報の蓄積伝播の研究，第II-3章問題フレームとしての大水害，II-3長崎豪雨災害，pp.36-60，1986.3
- 24) 片寄俊秀：災害その後に関する研究——長崎豪雨災害（1982）その後における都市復興過程をめぐって——（その2），長崎総合科学大学紀要，第27巻，第1号，pp.25-39，1986.6
- 25) 高橋和雄，伊勢田哲也，吉次俊博：昭和57年7月長崎豪雨による都市水害の本復旧調査と新しく導入された防災対策，自然災害西部地区部会報——3号，pp.61-71，1987.1
- 26) 高橋和雄：集中豪雨時の交通機関の防災対策に関する研究，International Association of Traffic and Safety Science 研究・研究報告集，Vol.5，pp.29-38，1987.3
- 27) 南嘉樹：建築改善および適切な建築配置による都市の水害防災性向上手法に関する調査研究，長崎総合科学大学紀要，第29巻，第1号，pp.155-162，1988.6
- 28) 高橋和雄：豪雨災害被災都市における防災力の向上と定着化，昭和63年度科学研究補助金（重点領域（1））研究成果報告書「災害警報と避難行動に関する研究」，pp.77-87，1989.7

- 29) 片寄俊秀：水害その後の都市変容に関する研究——1982長崎豪雨災害後の中島川流域を対象に——，日本建築学会中国・九州支部研究報告，第8号，pp.213-216，1990.3
- 30) 松田磐余，花井徳寛，中林一樹：中島川復興事業に対する被災住民の評価，自然災害科学，Vol.10，No.1，pp.23-32，1991.4
- 31) 高橋和雄：防災都市構想と斜面のまちづくり，——平成4年度公開講座——，「まちづくりと私達の暮らし」，pp.96-105，1992.7
- 32) 片寄俊秀：論集1982-1992 長崎豪雨災害と都市の再生，全288頁，1992.7
- 33) 高橋和雄，松永博之：長崎水害10年にみる防災の現状と課題，自然災害西部地区部会報・論文集，第15号，pp.94-103，1993.3
- 34) 高橋和雄：長崎防災都市構想とその課題に関する研究，同上，pp.104-114，1993.3
- 35) 高橋和雄：防災都市構想と斜面のまちづくり，同上，pp.135-142，1993.3
- 36) 高橋和雄：長崎水害における洪水・土砂災害の実態と社会経済的影響の分析，文部省科学研究費重点領域研究「自然災害の予備の予測と防災力」研究成果「傾斜都市域の洪水と土砂氾濫災害の予測と軽減・復興対策に関する研究」（研究代表者 高橋保），第一編，2.3章，pp.33-38，1993.3
- 37) 高橋和雄：長崎水害での応急復旧と本復旧，同上，第一編，5.1章，pp.152-164，1993.3
- 38) 高橋和雄：地域防災計画書の災害予防計画の妥当性の検討と改善，同上，第一編，5.2章，pp.165-172，1993.3
- 39) 高橋和雄：雲仙普賢岳の火山災害における都市システムの危機管理と社会的影響，同上，第一編，5.3章，pp.173-185，1993.3
- 40) 高橋和雄：長崎防災都市構想とその課題，同上，第一編，6.1章，pp.186-195，1993.3
- 41) 高橋和雄：文献目録の作成，同上，第二編，7章，pp.261-272，1993.3
- 42) 高橋和雄：長崎防災都市構想の達成に関する調査，自然災害科学，Vol.12，No.3，pp.237-250，1995
- 43) 高橋和雄：昭和57年長崎水害の特徴と教訓，地域防災データ総覧 風水害編 [改訂版]，(財)消防科学総合センター，pp.34-37，1999.3
- 44) 高橋和雄，棚橋由彦：1982長崎豪雨災害，西部地区自然災害資料センター，No.23，pp.43-49，2000.9
- 45) 松尾敬世，高橋和雄，吉川知弘，清水政治，原口徳文，植田禎子：特集記事 長崎大水害から20年—その教訓と現況，自然災害科学，Vol.22，No.2，pp.125-147，2003

(g) 人的被害・避難行動・情報

- 1) 岡林隆敏，高橋和雄：「人的被害，災害の情報の伝達」，昭和57年7月長崎豪雨による災害の調査報告書（長崎大学学術調査団），pp.125-137，1982.11
- 2) 狩野素朗：「社会工学的視点による長崎水害の問題点と今後の対応」，自然災害特別研究突発災害研究成果，No.B-57-3，昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究，pp.121-124，1983.3
- 3) 今本博健：水害時の情報伝達と避難行動について，自然災害特別研究突発災害研究成果，No.B-57-3，昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究，pp.125-132，1983.3
- 4) 岡林隆敏：昭和57年7月豪雨による長崎県の人的被害，自然災害特別研究突発災害研究成果，No.B-57-3，昭和57年7月豪雨災害に関する調査研究，pp.133-136，1983.3
- 5) 今本博健，石垣泰輔，大年邦雄：昭和57.7長崎水害における住民の避難行動について，京都大学防災研究所年報，第26号，B-2，pp.1-12，1983.4
- 6) 荒木憲一，太田保之，中根允文，高橋良：災害に対する反応からみた単極型うつ病と双極型躁うつ病の異質性について，社会精神医学，第7巻，第2号，1984.6
- 7) 松田磐余，花井徳寛，望月利男：長崎豪雨災害と台風8210号被害による人的被害と対策上の諸問題，総合都市研究，第22号，pp.107-115，1984
- 8) 高橋和雄，西中間孝一：昭和57年7月長崎豪雨時の路線バスの対応，昭和57年7月長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究（長崎大学工学部土木工学科），pp.79-90，1985.3

- 9) 岡林隆敏, 山手弘之:長崎豪雨災害における自治会の対応, 昭和 57 年 7 月長崎豪雨災害の解析及び防災対策に関する研究 (長崎大学工学部土木工学科), pp.91-103, 1985.3
- 10) 長橋純男:1982 年長崎豪雨災害——その住民被災の時刻歴——, 長崎総合科学大学地域要「地域論叢」, No. 2, pp.74-96, 1985.3
- 11) 荒木憲一, 高橋良, 中根允文, 太田保之, 石沢宗和, 富永泰規, 内野淳:自然災害と精神疾患—長崎水害 (1982) の精神医学的研究—, 精神神経学雑誌, 第 87 巻, 第 4 号, 1985.4
- 12) Nakane, Y., Tomonaga, Y., Araki, K., Ohta, Y. and Takahashi, R.:Epidemiologic Investigations Concerning Functional Psychoses in Nagasaki City, Genetic Aspects of Human Behaviour, 1985
- 13) 高橋和雄:昭和 57 年 7 月長崎豪雨時の路線バスの運転手の行動・判断, 自然災害科学, Vol.4, No.2, pp.56-68, 1985
- 14) 高橋和雄, 三浦正秀, 高橋裕:風水害によるドライバーの人的被害, 自然災害科学, Vol.7, No.3, pp.65-71, 1988.12
- 15) 高橋和雄, 鈴木裕久:豪雨災害被災都市における災害警報と避難行動に関する防災力の向上と定着化, 自然災害西部地区部会報—8 号, pp.86-95, 1989.12
- 16) 岡林隆敏:昭和 57 年 7 月長崎豪雨災害の概要と被災者の発生状況の分析, 長崎県の豪雨災害と自治体・自主防災組織の防災力, 第 3 章, pp.39-53, 1990.3
- 17) 岡林隆敏:長崎豪雨災害における自治会の対応と自主防災組織の形成, 長崎県の豪雨災害と自治体・自主防災組織の防災力, 第 4 章, pp.55-90, 1990.3
- 18) 高橋和雄:昭和 63 年 5 月島原水害にみる防災力の向上, 長崎県の豪雨災害と自治体・自主防災組織の防災力, 第 5 章, pp.91-125, 1990.3
- 19) 小田利勝:防災関係機関の意志決定——土石流——長崎市の事例, 平成元・2 年度科学研究補助金 (重点領域 (1)) 研究成果報告書「災害情報伝達過程の迅速化・正確化に関する研究」, pp.87-94, 1991.3
- 20) 薦田広章:長崎大水害の教訓, ——平成 4 年度公開講座——「まちづくりと私達の暮らし」, pp.60-65, 1992.7
- 21) 荒生公雄:防災教育のすすめ, ——平成 4 年度公開講座——「まちづくりと私達の暮らし」, pp.66-73, 1992.7
- 22) H. Suzuki, T. Saito, Y. Kawakami, K. Takahashi, Y. Matsui:A Social Psychological Study of Measures for Helping Persons Bereaved Due to Natural Disasters, Journal of Natural Disaster Science, Vol.14, No.2, pp.45-57, 1992.12
- 23) 鈴木裕久, 斎藤徳美, 川上善郎, 高橋和雄, 松井豊:自然災害遺族に対する社会心理学的援助の方策に関する研究, 全 15 頁, 1992
- 24) 高橋和雄:豪雨災害被災者遺族に対する援助の方策に関する研究, 自然災害西部地区部会報・論文集, 15 号, pp.27-32, 1993.2
- 25) 薦田広幸:“長崎大水害の教訓”, 長崎大学公開講座叢書 5「人にやさしい“まちづくり”——長崎から——」, 長崎大学, pp.69-76, 1993.3
- 26) 高橋和雄:長崎豪雨 10 年に見る自主防災組織の現状と課題, 自然災害科学, Vol.14, No.3, pp.219-234, 1995
- 27) 高橋和雄:長崎豪雨災害より 20 年, 消防科学と情報, No.69, 2002 夏, pp.4-7, 2002.12

3. 雑誌・その他

- 1) FOCUS 8 月 6 日号:長崎豪雨災害, pp.8-11, 1982.8
- 2) 長崎県:県政だより, 7.23 長崎大水害特集号, 全 20 頁, 1982.8
- 3) 松本泰重:坂の町長崎は自然の前にかくも無力だった, 週刊読売, pp.148-151, 1982.8
- 4) 大屋鍾吾:長崎水害と都市洪水, 暮らしと政治, No.289, pp.63-66, 1982.9
- 5) THE NAGASAKI:長崎大水害, 濁流・人間・ドラマ, pp.3-9, 1982.9
- 6) 長崎県:県政だより (No.335), 全 13 頁, 1982.9
- 7) 高橋和雄, 野口正人, 棚橋由彦, 岡林隆敏:記録的な集中豪雨——長崎南部地方に大災害発生, 土木学会誌, Vol.67, pp.72-74 (口絵 2 枚), 1982.9

- 8) 東長崎中学校：社会科作文資料 一九八二年七月二十三日長崎水害体験記, pp.101-132, 1982.9
- 9) 長崎市役所職員座談会：長崎水害になにをみた, 住民と自治, pp.18-23, 1982.10
- 10) 村上處直：社会問題としての災害——長崎集中豪雨の傷跡——, 月刊消防, pp.1-10, 1982.10
- 11) 柳川善郎：ドキュメント長崎集中豪雨——現地に取材して, 月刊消防, pp.11-18, 1982.10
- 12) 本吉庸浩：豪雨の恐ろしさと備えの重要性を教えた長崎水害, 近代消防, pp.34-48, 1982.10
- 13) 村上處直, 新坂理一郎：現地にみる長崎水害の問題点—都市水害にどう対応すべきか—, 近代消防, pp.49-56, 1982.10
- 14) 長崎市消防局：長崎大水害の概況と対応, 近代消防, pp.57-59, 1982.10
- 15) 篠塚昭次：都市災害は人災である, エコノミスト, pp.22-27, 1982.11
- 16) 宮入興一：長崎豪雨禍その政治経済学, エコノミスト, pp.28-36, 1982.11
- 17) 長崎県警察本部：7.23 長崎大水害, 警鼓, 10, 11 月合併号, pp.1-150, 1982.11
- 18) 日本の道を考える会：長崎水害と道路, 全 32 頁, 1982.12
- 19) THE NAGASAKI：明日の為の「水害」考, pp.48-52, 1983.6
- 20) 長崎県：自主防災組織—自分たちのまちは自分たちで守ろう—, 全 6 頁, 1983.6
- 21) 長崎海洋気象台：知っておきたい気象のしおり, 全 14 頁, 1983.6
- 22) 荒生公雄, 扇要子：豪雨防災教育のしおり, 全 31 頁, 1983.12
- 23) 辻篤子：How to くるま (朝日ブックレット), 第 13 章くるまは水に弱い?, 朝日新聞社, pp.28-29, 1984.4
- 24) 長与町：防災のしおり, 全 21 頁, 1984.6
- 25) 高橋和雄：長崎大水害からの教訓「歩道に乗り上げるだけでもクルマは助かった」, JAF MATE, 7 月号, pp.24-25, 1984.7
- 26) JAF：JAF ユーザーテストスペシャル「水深 60 センチメートル, クルマは走り続けられるか」, JAF MATE, pp.53-55, 1984.8
- 27) JAF：JAF USER TEST「冠水路走行水深 40 センチメートル, 距離 50 メートルの冠水路は渡り切れるか」, 私のくるま, 9 月号, pp.10-15, 1984.9
- 28) 長崎県地学会事務局：第IV部 長崎豪雨災害文献目録, 長崎県地学会誌, 第 39・40 号, 1984
- 29) 水谷：水害対策 100 のポイント 84「自動車は水害の危険もつくっている」, pp.185-187, 鹿島出版会, 1985.7
- 30) JAF：クルマのための防災学, JAF MATE, pp.9-13, 1988.9
- 31) 高橋和雄：現代社会と水害, 河川, No.517, pp.3-4, 1989.8
- 32) 長崎市総務部・教育委員会：わたしたちのくらしと水害, 全 28 頁, 1990.3

4. 講演概要

(a) 自然災害科学総合シンポジウム

第 19 回 1982.11

- 1) 野口正人, 中村武弘, 平山康志：浦上川の出水特性と被害分析——昭和 57 年 7 月長崎大水害——, pp.73-76
- 2) 今本博健：水害時の情報伝達と避難行動について——昭和 57.7 長崎水害の実態調査による検討——, pp.283-288

第 20 回 1983.9

- 3) 坂上務, 伊勢田哲也：昭和 57 年 7 月豪雨災害に関する調査研究 (長崎を中心とした豪雨災害), pp.17-20
- 4) 後町幸雄, 中島暢太郎, 元田雄四郎：昭和 57 年 7 月豪雨について, pp.192-195
- 5) 栗林栄一, 中村俊六, 河邑真：昭和 57 年 7 月長崎豪雨災害の特異性, pp.196-200
- 6) 伊勢田哲也, 落合英俊, 棚橋由彦：昭和 57 年 7 月長崎豪雨による土石流災害に関する一考察, pp.201-204
- 7) 高橋和雄, 池田虎彦：昭和 57 年 7 月長崎豪雨による自動車の被害調査, pp.205-208
- 8) 野口正人, 中村武弘, 武田篤：昭和 57 年 7 月長崎水害における河川氾濫, pp.209-212
- 9) 高橋保, 大久保賢治, 中川一：長崎豪雨における中島川の洪水氾濫解析, pp.213-216
- 10) 元田雄四郎, 林静夫, 坂上務：長崎豪雨における農林被害について, pp.255-258

第 21 回 1984.10

- 11) 薦田広章, 古本勝弘, 武政剛弘, 一ノ瀬和雄: 小河川の河川改修に伴う流出の変化, pp. 297-298
- 12) 望月利男, 松田磐余, 花井徳實: 昭和 57 年 7 月 23 日の長崎豪雨災害における土石流・斜面崩壊の発生に関する判別解析, pp. 417-420
- 13) 阿部雅彦, 寺崎勉, 島村義晴, 渡辺文利: 1982 年 7 月災害の事例について, pp. 421-424
- 14) 望月利男, 松田磐余, 花井徳實: 昭和 57 年 7 月 23 日の長崎豪雨災害における全壊家屋居住者の被害状況と行動, pp. 511-514
- 15) 長橋純男: 1982 年 7 月 23 日長崎豪雨災害における住民被害の実態調査, pp. 515-518
- 16) 高橋和雄, 西中間孝一: 水害と交通, pp. 519-522

第 4 回自然災害科学会学術講演会要旨集 1985. 10

- 17) 今本博健, 石垣泰輔, 大年邦夫: 水害時における住民の対応行動の分析, pp. 141-142
- 18) 高橋和雄, 西中間孝一: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨時の路線バスの運転手の行動・判断, pp. 153-154
第 7 回自然災害科学会学術講演会要旨集 1988. 10
- 19) 三浦正秀, 高橋和雄, 高橋裕: 風水害によるドライバーの人的被害, pp. 124-125

(b) 土質工学研究発表会

第 18 回 1983. 6

- 1) 棚橋由彦, 伊勢田哲也, 落合英俊, 川内俊英, 野口和宏, 生野泰宏: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨における土石流災害に関する一考察——数量化理論を用いて——, pp. 35-36
- 2) 中山雅之, 川崎浩司, 山本俊雄: 1982 年豪雨時の斜面崩壊による人命・家屋災害の実態調査, pp. 81-82
- 3) 福富幹男, 須田隆明, 渡辺文利: 昭和 57 年 7 月豪雨による長崎市周辺の被害例, pp. 83-84
- 4) 花井徳實: 82. 7. 23 長崎市における豪雨災害とその地形的要因について, pp. 1251-1254

第 19 回 1984. 6

- 5) 棚橋由彦, 伊勢田哲也, 川内俊英: 土石流発生予測法の一試案について, pp. 25-28
- 6) 伊勢田哲也, 棚橋由彦, 山本芳裕: 長崎豪雨時における緩斜面の崩壊機構に関する研究, pp. 1273-1276

(c) 土木学会西部支部研究発表会

昭和 57 年度 1983. 2

- 1) 佐々木慶一, 野口正人, 金子浩二: 洪水流出に及ぼす地形因子の影響について, pp. 170-171
- 2) 野口正人, 中村武弘, 武田篤, 松本尚樹: 都市河川の洪水氾濫形態について, pp. 172-173
- 3) 伊勢田哲也, 落合英俊, 棚橋由彦, 松本守, 八百山孝, 高塚辰司: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨における土砂崩壊の実態, pp. 346-347
- 4) 小原直, 川添正道, 浜田英治, 三島勝彦, 井上誠一郎, 平本健太郎: 土石流危険渓流と 7. 23 土石流災害, pp. 348-349
- 5) 田島芳雄, 松本康之, 西田末弘, 山下栄爾, 池田修, 森昭司: 急傾斜地崩壊危険箇所と 7. 23 斜面崩壊, pp. 350-351
- 6) 伊勢田哲也, 棚橋由彦, 池田敏明, 池田宏, 井上和則: 長崎市における過去の土砂災害と降雨特性との関係, pp. 352-353
- 7) 落合英俊, 松尾勝, 東浩之, 木下健一郎, 山本芳裕: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による大規模開発団地周辺の土砂崩壊, pp. 354-355
- 8) 棚橋由彦, 川内俊英, 野口和宏, 生野泰宏, 吉岡隆之, 蒲川剛志: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨における土石流災害の実態, pp. 360-361
- 9) 渡辺浩明, 樗木武, 平田登基男: 統計的手法による崖崩れの安全度解析, pp. 364-365
- 10) 高橋和雄, 岡林隆敏, 坂井秀一: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による交通施設の被害, pp. 400-401
- 11) 岡林隆敏, 高橋和雄, 吉田啓三: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による都市施設の被害調査 (その 1), pp. 402-403
- 12) 高橋和雄, 岡林隆敏, 山野長弘: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨による都市施設の被害 (その 2), pp. 404-405

昭和 58 年度 1984. 2

- 13) 小西保則, 武政剛弘, 永田正美: 石造アーチ橋の洪水流への影響と流体抗力に関する実験的研究, pp. 42-43

- 14) 下津昌司, 杉山茂: 長崎豪雨のDAD特性について, pp. 174-175
- 15) 野口正人, 米倉広幸, 菅浩一: 流出解析における流域特性量の評価に関する一考察, pp. 178-179
- 16) 野口正人, 秀徳典穂, 小中俊二: 氾濫解析における境界条件について, pp. 180-181
- 17) 伊勢田哲也, 棚橋由彦, 吉田敏純, 山本芳裕, 小川康浩: 昭和 57 年長崎豪雨時の本河内町奥山地区における大規模山崩れ機構に関する一考察, pp. 292-293
- 18) 藤本繁雄, 平田登基男, 坂本紘二, 樗木武: 昭和 57 年長崎災害における土石流発生の構造解析, pp. 294-295
- 19) 伊勢田哲也, 持下輝雄, 川内俊英, 鳥飼源久: 豪雨時緩斜面の崩壊機構に関する実験的研究, pp. 298-299
- 20) 棚橋由彦, 川内俊英, 生野泰弘, 野口和弘: 土石流災害の危険度評価, pp. 300-301
- 21) 棚橋由彦, 伊勢田哲也, 川内俊英, 木下幸弘: 数量化理論を用いた土石流災害に関する統計学的考察, pp. 302-303
- 22) 坂本紘二, 山田信, 平田登基男, 樗木武: 昭和 57 年長崎豪雨水害にみる都市水害被災の構造——土地利用の変化と被災の関係——, pp. 426-427

昭和 59 年度 1985. 2

- 23) 小西保則, 武政剛弘, 永田正美: 石造アーチ橋の洪水流への影響と流体効力に関する実験的研究 (第 2 報), pp. 46-47
- 24) 野口正人, 秀徳典穂, 杉元裕紀: 市街地での氾濫解析法, pp. 260-261
- 25) 野口正人, 中村武弘, 桑本伸二: 洪水流の 3 次元数値解析, pp. 278-279
- 26) 山本芳裕, 伊勢田哲也, 棚橋由彦, 永松幹雄, 馬場真, 峰康孝: 浸透流と飽和度上昇による強度低下を考慮した斜面の有限要素解析, pp. 342-343
- 27) 棚橋由彦, 伊勢田哲也, 八百山孝, 小原直, 西村利彌: 土石流発生の危険度評価と雨量基準について, pp. 346-347
- 28) 樗木武, 坂本紘二, 平田登基男, 河野雅也, 藤本繁雄: 土石流発生危険度予測の一方法——昭和 57 年 7 月長崎大水害の場合——, pp. 348-349
- 29) 西中間孝一, 高橋和雄: 昭和 57 年 7 月長崎豪雨時の路線バスの運転手の行動・判断, pp. 434-435

昭和 60 年度 1986. 3

- 30) 小西保則, 武政剛弘, 永田正美: 石造りアーチ橋の洪水流への影響を流体抗力に関する実験的研究 (第 3 報), pp. 10-11
- 31) 野口正人, 米倉広幸, 飯盛俊治, 武藤英海: 水文観測による土中浸透量の評価について (第 2 報), pp. 174-175
- 32) 米倉広幸, 野口正人: 3 次元浸透流の数値シミュレーション, pp. 182-183
- 33) 野口正人, 奥野隆平: 市街地河川を対象とした氾濫解析, pp. 202-203
- 34) 樗木武, 平田登基男, 藤本繁雄: 土石流発生危険度判定法の考察と適用, pp. 420-421
- 35) 吉次俊博, 高橋和雄, 岡林隆敏: 昭和 57 年 7 月豪雨による都市災害の復旧調査, pp. 458-459

昭和 61 年度 1987. 3

- 36) 野口正人, 中村武弘, 迫慎一: 低平地都市域の流出解析, pp. 276-277
- 37) 野口正人, 米倉広幸, 原宏一: 表層土壌の特性の違いによる土中浸透量の評価と流出解析, pp. 278-279
- 38) 中山洋, 荒牧昭二郎, 中島順子, 今泉繁良: 標高データファイルを使った長崎地区斜面災害への対応, pp. 356-357

(d) 農業土木学会九州支部講演会

第 60 回 1982. 11

- 1) 古本勝弘, 武政剛弘, 薦田広章, 一ノ瀬和雄: 八朗川水系の河川災害——7. 23 長崎水害——, pp. 5-8

第 62 回 1983. 11

- 2) 中村昇: 57. 7. 23 長崎大水害について報告, pp. 1-4
- 3) 藤原輝雄, 渡辺潔, 細山田健三: 降雨エネルギーより見た長崎市における土砂災害, pp. 235-236

(e) 日本建築学会九州支部研究報告会

第 27 回 1983. 3

- 1) 小森清司, 末岡慎佑, 蓼原真一, 原田哲夫, 永藤政敏: 7. 23 長崎集中豪雨による建築構造物の被害の調査報告 (第 1

報 調査概要と総括), 構造系, pp. 237-240

- 2) 小森清司, 末岡禎佑, 蓼原真一, 原田哲夫, 永藤政敏: 7.23 長崎集中豪雨による建築構造物の被害の調査報告 (第 2 報 浦上水系の被害について), 構造系, pp. 241-244
- 3) 小森清司, 末岡禎佑, 蓼原真一, 原田哲夫, 永藤政敏: 7.23 長崎集中豪雨による建築構造物の被害の調査報告 (第 3 報 中島川水系の被害について), 構造系, pp. 245-248
- 4) 小森清司, 末岡禎佑, 蓼原真一, 原田哲夫, 永藤政敏: 7.23 長崎集中豪雨による建築構造物の被害の調査報告 (第 4 報 八郎川水系の被害について), 構造系, pp. 249-252

(f) 日本建築学会大会

昭和 58 年度 1983. 9

- 1) 小森清司, 末岡禎佑, 蓼原真一, 原田哲夫, 永藤政敏: 7.23 長崎集中豪雨による建築構造物の被害, 構造系, pp. 2375-2376
- 2) 山本俊雄, 川崎浩司, 花井徳實: 7.23 長崎豪雨災害について (死者の出た崩壊地の特徴について), 構造系, pp. 2467-2468
- 3) 花井徳實: 7.23 長崎豪雨災害について (その 1・地形的要因との関係について), 構造系, pp. 2645-2646
- 4) 片寄俊秀: '82 長崎豪雨災害に関する計画学的研究, 計画系, pp. 2259-2260

(g) 砂防学会シンポジウム

第 15 回 1982. 11

- 1) 鍋島泰夫: 長崎災害時の気象状況について, pp. 1-30
- 2) 小鳥井清: 長崎災害の現況について, pp. 31-46
- 3) 竹下敬司: 長崎災害の現象論的側面, pp. 47-60
- 4) 陶山正憲: 森林保全の立場から長崎災害を考える, pp. 61-74
- 5) 渡辺正幸, 水山高久: 地域防災の立場から長崎災害を考える, pp. 75-87

第 32 回 「斜面における防災を考える」 2002. 10

- 1) 高橋和雄: 都市防災, pp. 9-18
- 2) 水山高久: 土砂災害対策 (S57 長崎水害を中心として), pp. 19-26
- 3) 増崎晴彦: 斜面市街地における防災まちづくりについて, pp. 51-57
- 4) 植田禎子: 長崎大水害を振り返って, pp. 59-64

(h) その他

- 1) 日本土地法学会: 第 22 回大会報告要旨集 水害——その予防と訴訟, 全 28 頁, 1984. 45
- 2) 藤本繁雄, 平田登基男, 樗木武: 昭和 57 年長崎大水害における土石流の実態把握と考察, 土木学会第 39 回年次学術講演会, 第三部, pp. 169-170, 1984. 10
- 3) 樗木武, 平田登基男, 藤本繁雄: 土石流発生危険度の一判定法, 土木学会第 40 回年次学術講演会, 第三部, pp. 153-154, 1986. 11
- 4) 平田登基男, 樗木武, 藤本繁雄: 土石流発生危険度の一提案と適用, 土木学会第 41 回年次学術講演会, 第三部, pp. 601-602, 1987. 11

災害の経過

日付	時間	イベント
7月4日(日)		○梅雨期の無降水日が17日間続き記録を更新
7月11日(日)		○長崎市に131.5ミリの降水量(長崎海洋気象台)
7月13日(火)		○梅雨前線が停滞、県北を中心に土砂崩れなどの被害が広がる
7月15日(木)	22:30 この日	○大雨洪水雷雨波浪注意報 雨量0.5ミリ
7月16日(金)	9:25 15:40 この日	○大雨洪水警報雷雨波浪注意報 ○消防局災害対策本部・消防署警備本部設置 第2警戒配備 ○長崎市災害警戒本部・水防本部設置 ○大雨洪水強風波浪注意報(警報解除) ○消防局・消防署・市役所上記各本部解散 雨量21ミリ
7月17日(土)	この日	雨量31.5ミリ
7月18日(日)	この日	雨量41.0ミリ
7月19日(月)	6:30 この日	○大雨洪水雷雨注意報 雨量8ミリ
7月20日(火)	6:20 20:40 21:00 この日	○長崎市に243ミリの降水量、この日までに598ミリに達す ○県内各地に梅雨前線の被害、農林・土木関係などの被害総額は49億円 ○大雨洪水警報雷雨波浪注意報 ○消防局災害対策本部・消防署警備本部設置 第2警戒配備 ○長崎市災害警戒本部・水防本部設置 ○波浪注意報(警報解除) ○消防局・消防署・市役所上記各本部解散 雨量243ミリ(10日~20日11日間で581.5ミリ・資料編参照)
7月21日(水)		雨量0ミリ
7月22日(木)		雨量0ミリ
7月23日(金)	13:50 14:20 15:25 16:50 17:00	○雨の予報は県内各地とも「ところにより強く降る」 ○波浪注意報 ○長崎県災害警戒本部・水防本部設置 ○長崎県警察本部に災害警備連絡室(警備課)設置(吉岐・対馬地方に大雨洪水警報が発表されたため) ○長崎地方に大雨洪水強風雷雨注意報発表 ○大雨洪水強風雷雨波浪注意報発表 発達中の低気圧が対馬海峡を東進。このため梅雨前線の活動が活発化し、今夕から明朝にかけて雷を伴った強い雨が降り、がけ崩れや中小河川の増水、落雷の起こる恐れあり。雨量は30~50ミリの見込み。沿岸の海上では波が高くなり2~3mの見込み。 ○鉄道気象警報 風が著しく強くなる。大雨が降る。 ○大雨洪水警報強風雷雨波浪注意報発表 対馬海峡に低気圧があって東に進んでいる。梅雨前線の活動が活発になってきた。長崎地方では今夕から明朝にかけて、時々雷を伴った強い雨が降り、山崩れ・がけ崩れ・低地の浸水・河川の増水・氾濫・落雷など大きな災害の発生する恐れがある。十分警戒してください。雨量は50~100ミリの見込み、局地的には150ミリを超えるところもあり、比較的短時間に集中して降るでしょう。また南寄りの風が強く、陸上で10m海上では10~15mに達し、波が高くなる見込みで船は注意を要する。波の高さは2~3mの見込み。 ○長崎県警察本部災害警備本部(B号体制) 県下25警察署に現地災害警備本部設置(19:30A号体制となる) ○長崎市消防災害対策本部 中央・北両消防署警備本部設置(第2警戒配備体制) ○長崎市災害警戒本部・水防本部設置。ほとんど降雨なし。 ○大雨洪水警報がテレビ・ラジオで放送される。 ○吉岐対馬地方の大雨洪水警報解除 五島地方に大雨洪水警報発表(福江測候所観測19:00~1時間雨量16ミリ12:00~5時間雨量22ミリ 23日)

	終日で49ミリ) 長崎は09:00~10:00に1ミリだけで17:00までは0ミリ。
18:00	○1時間雨量15ミリ, 雷雨 (23日は09:00~10:00に1ミリ降っただけで, これ以後24:00までに448ミリ降る) ○長崎市内で散発的停電。 ○NBCテレビ警報の内容を放送 (~18:30)
18:30	○消防局災害対策本部警防班5名 通信員6名増強 中央・北両消防署も増強。 ○西彼大瀬戸町板ノ浦から床下浸水の119番通報。長崎市消防局への第一報。 ○このころから消防局通信指令室に災害通報が入り始めるが, 大瀬戸・長与・時津方面が主。 ○NHKテレビ, 警報の内容を放送 (~19:00) ○西部ガスにガス漏れ通報。
19:00	○1時間雨量27ミリ (17:00~2時間雨量42ミリ) ○長崎市内の災害通報が入り始める。家屋浸水・小河川氾濫など。 ◎避難所開設 江平中学校 (避難者10人) 三重田公民館 (6人) 以後逐次開設
19:03	○西彼琴海町長浦から床上浸水の110番通報。県警への第一報で, このあと通報ひっきりなし。 ○119番通報は翌24日午前2時まで1140件を数えたところで自動カウンターのヒューズが飛んだためか停止し, その後の件数不明。
19:10	○県災害情報第2号を通報 (~19:20) ○長崎市消防局, 分隊 (車両) ごとに出勤を開始。
19:16	○長崎駅発上り特急「あかつき4号」から国鉄全面運休 (7月27日から一部運行 31日全線開通)
19:20	○消防局第2警戒配備を一挙に第4警戒配備体制とし, 全職員団員を非常召集。消防隊分隊 (車両) は19:10~19:30の間に全部出勤, 初動活動に従事。(7月28日09:00第4を第2警戒配備に復し, 8月16日09:00第1警戒配備となる) ◎山崩れ 北栄町 (弥永方) 15×48×4 死1 全2 (23:30 119番通報)
19:30	○昭和町で濁流のため車30台立往生。浦上署パト出勤, 45人を高台に避難させる ○災害110番 (10名体制) を設置 ○県警災害警備本部のB号体制 (16:50) をA号体制とする。 ○県警, 災害警備本部を設置。関係各署員を非常召集。東長崎の管区・県警機動隊員100人が出勤。日見トンネルを超えて30人が長崎入りするが, 70人は国道34号が陥没して引き返す。
19:35	○長崎電軌, 冠水のため運転停止決定。レール上に電車が放棄される。 ○新長崎局の発信電話50%を規制, その後全市に拡大。避難と安否気遣う電話が殺到し, 重要加入電話を除き不通状態に。
19:40	◎山崩れ 滑石3丁目 (吉田方) 10×5×1 死1 傷3 全1 (23日20:40現場覚知) ◎山崩れ 北陽町 60×20×0.6 死1 全2 部1 上1 (24日00:05 119番通報) ◎山崩れ 川平町 (赤崎方) 20×8×3 死1 傷2 半1 部1 (23日23:45 119番通報) ◎長崎市西町 (川中方) がけ崩れ, 家族4人が閉じ込められている。長崎署パト, 広報車出勤。低部市街地住民, 通行人に避難をよびかけ
19:50	◎山崩れ 田中町赤松 (城下方付近) 100×20×3 死4 傷2 全10 半1 部1 上1 (現場覚知)
20:00	○中島川氾濫, 魚の町 (川原方) 2Fで救助を求めている。長崎署員急行, 濁流の中5人救出 ◎1時間雨量111.5ミリ 雷雨 (17:00~3時間雨量153.5ミリ) ○一部停電区域が出る ○消防局通信指令室に災害通報相次ぐ。河川氾濫・道路冠水・土砂崩壊・家屋全壊半壊など。 ◎山崩れ 芒塚町 500×70×10 死16 不1 全12 半6 部7 上24 流10 (23日20:18 119番通報) ◎山崩れ 宿町 15×25×3 死11 傷10 全9 半1 部4 (23日21:40 119番通報) ◎山崩れ 田中町田河内 700×30×2 死6 傷4 全6 半3 部1 上2 (現場覚知) ◎山崩れ 北栄町 (榊山方) 30×35×8 死3 傷2 全4 (23日20:40 現場覚知) ◎山崩れ 鳴見町 450×10×8 死1 傷2 全3 上1 (現場覚知) ◎山崩れ 滑石2丁目 50×40×10 死6 傷8 全3 部4 (23日22:30 現場覚知) ○諫早市災害対策本部設置。 ○20時過ぎより電話の輻輳。 ○20時過ぎより報道各社に細かい災害情報が入りだす。 ○20時ころより県警110, 119番への通報が集中。
20:05	◎山崩れ 東町長竜寺 200×50×10 死2 傷10 全4 半5 上17 下1 (現場覚知) ◎山崩れ 三川町 (朝日橋) 8×20×7 死6 傷1 全1 部1 下1 (23日21:35 119番通報)
20:10	◎山崩れ 東町侍石 700×70×40 死4 傷2 全7 半3 上5 下6 (23日22:10 119番通報)
20:11	○浦上水源池に男性が流された

20:15 ○芒塚町国道34号, 土石流によって2か所決壊
 ◎山崩れ 東町瀬古 400×50×5 死6 全1 半1 下1 (現場覚知)
 ◎山崩れ 古賀町畑中 40×80×3 死1 傷2 全8 半1 部4 (現場覚知)
 ◎山崩れ 川平町(藤田方) 150×15×7 死2 傷1 全2 部4 下3 (23日23:35 119番通報)
 ◎山崩れ 三川町(小玉方) 150×20×7 死1 傷3 全6 半1 部1 (24日05:00 119番通報)
 ○長崎市矢上町の東公民館前国道で県営バス2台が立ち往生。水が窓際まで。
 ○このころ, 本河内町奥山で山津波発生。芒塚町, 北高飯盛町補伽でも土石流。

20:20 ○長崎海上保安部に巡視艇の出動を要請
 ○火災発生 矢上町牟田歯科医院付近 3棟延べ762㎡全焼

20:21 ○矢上停電。

20:30 ○日見トンネル付近60~70cm冠水, 古川町床上浸水
 ○県営バス全線の運行停止を指示
 ○長崎市街地の中島川が警戒水域を突破 (20:00), 次いで浦上川, 東長崎地区の八郎川, 中尾川等の河川が氾濫
 ◎長崎県災害対策本部設置 (14:20設置の災害警戒本部を切替え)
 ◎長崎市災害対策本部設置 (16:50設置の災害警戒本部を切替え消防局災害対策本部・消防署警備本部・市水防本部を統合 昭和58年1月31日17:00閉鎖まで存続9
 ◎長崎市水道局災害対策本部特設
 ◎長崎県警察本部災害警備本部は報道機関を通じて市民に対し早期避難を呼びかけ。
 ◎山崩れ 出雲1丁目 150×40×5 死2 全3 半2 上5 (24日00:30 現場覚知)
 ◎山崩れ 昭和町(松崎方) 200×16×8 死3 全2 半1 下2 (23日22:55 119番通報)
 ◎山崩れ 戸石町坂 70×15×10 死1 傷7 全7 半5 部3 上9 下2 (23日22:41 119番通報)
 ◎山崩れ 川内町 52×20×5 死8 傷2 全4 (23日22:56 119番通報)
 ◎山崩れ 本河内町奥山 200×100×10 死23 不1 傷9 全18 半4 部6 (24日01:31 駆け込み通報)
 ○停電区域次第に広がる。
 ○脈橋変電所冠水のため浜町一帯停電。

このころ ○県警, 20時現在の被害状況を発表。

20:31 ○NBCラジオ, 災害放送に切替え。

20:35 ◎山崩れ 上戸石町長谷 1,000×100×2 死15 傷4 全6 半2 上2 下4 流6 (24日02:13 119番通報)
 ◎山崩れ 平間町 400×30×7 死8 傷1 全5 半2 部2 下2 (23日22:45 119番通報)
 ◎山崩れ 平間町 400×30×7 死8 傷1 全5 半2 部2 下2 (23日22:45 119番通報)

20:40 ○大雨情報第1号
 梅雨前線の活動が活発になり, 長崎では夕方から強い雨が降っている。雨量(単位ミリ)は16:00~17:00 平戸84 17:00~18:00 松浦89 18:00~19:00 大瀬戸64 長浦岳153 19:00~20:00 長崎111.5 諫早66 大村68 長浦岳118 あと断続的に明朝まで強い雨が降る。長崎港満潮は22:35
 ○NBCラジオ, 安否報道第一報。
 ○県警, 避難時のガス, 火災の注意呼びかけ。

20:42 ○銅座のスタンドバーで女性が救助を求める

20:45 ◎山崩れ 界町 150×40×4 死2 全7 半6 部2 上1 下2 (団現場覚知)
 ◎山崩れ 中里町 150×15×3 死2 全4 半1

20:47 ○北栄町で2軒生き埋め

20:51 ○松山町交差点1.5m冠水

20:52 ○長崎市役所停電。

21:00 ○扇町深堀アパート付近の住民, 浦上川氾濫で孤立, 救助を求めている, 浦上署員出動, 9世帯30人を避難誘導
 ○松山町体育館近くのテニスコートで1人流される
 ○川平町バス停で男性4人孤立, 救助を求める
 ○1時間雨量98ミリ (17:00~21:00 4時間雨量251.5ミリ)
 ◎山崩れ 船石町 100×30×5 死3 傷1 全2 (24日01:25 119番通報)
 ○九州電力, 災害対策本部設置。

21:05 ○春日町の2人, 海に流された

21:07 ○大浜町, 子供2人が海に流された

21:10 ○浦上川の氾濫により目覚町, 床上浸水, 長崎署員出動, 浸水家屋から4人救出
 ○田中町, 1人川に流された (23:54 遺体発見)
 ◎山崩れ 東立神町(太田方) 80×6×1 死1 半1

このころ	○報道各社、県警の呼掛けを流す。
21:12	○田中町、家とともに流された
21:17	○万屋町、2人流された
21:18	○船大工町スナック店内の水圧が強くドアが開かない、出動警察官より救助の報告あり
21:22	○上戸町、川内方隣倒壊、中に人がいる
21:30	○消防局通信指令室に人身事故発生の通報相次ぐ。7月24日02:00まで1,140件（災害通報） ○中島川の増水が大体ピーク。場所により若干異なる。
21:31	○中里町、尾上方倒壊、生埋め
21:34	○宿町、山口食堂、家が土砂に埋もれ、2人生埋め（22:50救出）
21:35	○川平町、家が流され2人生埋め
21:37	○諫早市避難告知を実施。
21:40	◎山崩れ 西山木場一の坂 150×80×10 死7 全4 部1 下1（23日23:40 119番通報） ○長崎県知事 自衛隊法第83条に基づき陸上自衛隊に対し災害派遣要請。陸自大村駐屯部隊の255人は道路寸断のため、西海橋経由で国道206号を大きくう回、途中から徒歩で長崎へ。
21:47	○銅座橋の上でタクシーが流される
21:56	○NBCテレビ、災害放送に切替え、個人情報流す。
22:00	○1時間雨量102ミリ（17:00～5時間雨量353.5ミリ） ○長崎県災害救助本部設置 長崎市に災害救助法適用（翌24日 多良見・飯盛・長与・時津・三和・琴海・大瀬戸・外海の各町と諫早市に逐次適用） ◎山崩れ 西山台2丁目 80×30×3 死2 半2（24日02:00 現場覚知） ◎山崩れ 辻町 80×40×7 死1 傷2 全3 部2（26日08:30加入電話連絡） ◎山崩れ 上戸町（がけ） 7×10×5 死1 部1（団現場覚知）
22:01	○女の都公民館近くで4人生埋め
22:05	◎山崩れ 鳴滝3丁目 150×25×1 死23 不1 傷2 全10 半2 部10（23日22:17 119番通報）
22:10	◎山崩れ 小瀬戸（がけ）町 90×8×2 死1 全1 部1（23日22:40団現場覚知）
22:18	NHKラジオ災害放送に切替え。個人情報を流す。
22:20	○大雨情報第2号 21:00現在背振山レーダーの情報によれば、強い雨の区域は長崎市・五島灘中部・佐世保市・大村市・諫早市の各部の広い範囲にあり、1時間前からはほとんど動いていない。明朝までさらに70～100ミリ、多いところで150ミリを超える見込み。引き続き厳重注意を要する。降り出しからの雨量（ミリ）平戸190 佐世保188 大村236 諫早301 長浦岳388 長崎358 島原74
22:26	○長崎市西山台田中方が崩れ、1人生き埋め。浦上署員、1遺体収容
22:30	○火災発生 中里町赤瀬方 1棟延べ161㎡全焼 生石灰の自然発火 ◎山崩れ 戸町3丁目 25×20×10 死7 傷2 全3 半1 部3（24日01:00 現場覚知） ◎山崩れ 江の浦町（江上方がけ） 20×6×2 死1 全1 部1（23日23:04 加入電話連絡） ○海上保安部は県警本部からの連絡で、死体捜索のための巡視艇を長崎港内に出動させる ○NHKテレビ、災害放送に切替え、個人情報流す。 ○西部ガス、災害対策本部設置。
22:35	○長崎港・橘湾満潮
22:40	◎山崩れ 昭和町（高田方） 110×22×10 死3 全2 半2 部1 下1（24日00:03 119番通報） ○消防団員が活動を開始（人命救助、遺体発掘、被災地の土砂除去など） ○長崎高等職業訓練校（長与町）を緊急避難場所として提供 ○県警察本部、長崎署、東長崎署では避難者約300人に会議室などを提供 ◎山崩れ 川平町内平治山ダム 400×60×8 死34 傷11 全22 半1 部2 上1 下3（24日01:43 119番通報） ◎山崩れ 泉町（谷本方） 15×40×7 死1 傷5 全1 ○川平町で土石流
22:48	○田中町、畑の中に車が落ちた、中に人がいる様子
22:49	○昭和町、裏山が崩れ5人生埋め
22:53	○三川町、2軒倒壊、4人生埋め、2人救助
23:00	○1時間雨量61ミリ（19:00～4時間雨量376ミリ 17:00～6時間雨量414.5ミリ） ◎山崩れ 小江原町（元川方） 370×40×7 死4 全1 部2 上2 下2（23日23:00 119番通報） ○電電公社よりNHK、NBC、KTNに緊急以外の電話の自粛の放送の依頼。
23:18	○陸上自衛隊大村駐屯地出発123名（先発隊27名は22:58出発）
23:30	○本河内町奥山が全滅

		<p>◎山崩れ 小ヶ倉町2丁目(がけ) 20×30×15 死1 傷3 全1 (24日00:20 消防電話連絡)</p> <p>○以上死者227 行方不明者3 別に流出31 同行方不明者1で、合計死者258 行方不明者4</p> <p>○NBCラジオ、個人情報を流し始める。</p> <p>○大雨情報第3号</p> <p>23:10背振山レーダーの観測によれば、島原半島から長崎付近にかかっていた強い雨雲は、少し南下したが、別の強い雲が西彼杵半島から五島付近に伸びている。また五島の西に強い雨雲があり、明朝には150～200ミリ降る見込み。雨の降り方には厳重注意を要する。23:00現在の雨量(ミリ) 平戸221 佐世保189 長浦岳425 大村277 諫早360 長崎419 島原97</p> <p>23:58 ○松山町武道館の所に死体が浮いている</p> <p>24:00 ○1時間雨量32.5ミリ(17:00～7時間雨量447ミリ 23日00:00～24時間雨量448ミリ)</p> <p>○停電ピーク 現在停電62,000戸(配電率69.6%) (7月29日19:00 奥山地区を除き停電解消)</p> <p>この日 ○12遺体収容。</p>
7月24日(土)	0:25	<p>○大雨情報第4号</p> <p>23:40背振山レーダー観測によれば、強い雨雲が国見山から大村・諫早を通り、これが二つに分かれ、ひとつは長崎の南を通り五島の南部へ、他の一つは雲仙をとおり熊本県南部に達している。このため長崎地方の雨はまだ続き、特にこの強い雨雲に覆われた地方では、1時間に20～40ミリ、またそれ以上の大雨となっているので、厳重に警戒してください。24:00までの雨量(ミリ) 国見山181 佐世保201 大村296 諫早395 五家原284 長崎448 絹笠山164 島原114 (注 23日00:00以降)</p> <p>1:00 ○1時間雨量2ミリ</p> <p>1:30 ○大雨情報第5号</p> <p>00:30背振山レーダー観測によれば、今まで大雨を降らせていた強い雨雲は、佐賀県から福岡県・熊本県方面に移動、一部が島原半島にかかっている。このため島原半島南部を除き小降りとなったが、五島灘にはまた新たな雨雲が現れ、島原半島南部では、1時間に50ミリ以上の雨が降っており、まだ警戒の必要がある。昨日の降り始めからの今日01:00までの雨量(ミリ) 佐世保205 大村298 諫早398 長崎450 絹笠山222 島原153 口ノ津182 また00:00～01:00の1時間雨量は、絹笠山58 島原39 口ノ津53</p> <p>1:47 ○火災発生 目覚町長崎中央部品有限会社 1棟部分焼</p> <p>2:00 ○1時間雨量38ミリ</p> <p>2:13 ○陸上自衛隊大村第16普通科連隊150名西海橋経由琴海町から徒歩で滑石到着。03:45人命救助活動に入る。以後、後続の部隊が逐次来着。(また派遣要請も数次にわたり、最終的に部隊艦船数31 総員3,673名 延べ人員27,328名に達した)</p> <p>2:15 ○市の避難所61箇所開設完了。うち43か所に合計1,894人避難。</p> <p>2:30 ○知事がハワイで緊急報告を受け、人命救助最優先などの応急対策を指示</p> <p>○大雨情報第6号</p> <p>02:00背振山レーダー観測によれば、長崎市の南、平戸の西方海上に雨雲が観測された。このため長崎では01:00～02:00の1時間に38ミリの強い雨が降った。今後も小さな強い雨雲がひんぱんに近づき、1時間に20ミリ以上の雨が降る恐れがあり、なお警戒を要する。02:00までの雨量(ミリ) 平戸200 佐世保212 大村305 諫早406 長崎488 絹笠山238 島原168 口ノ津187 (注 7月23日00:00以降の雨量)</p> <p>3:00 ○1時間の雨量13ミリ</p> <p>○このころ中央橋付近では水がひいてしまった。</p> <p>3:25 ○大雨情報第7号</p> <p>03:00現在の雨量(ミリ) 佐世保214 大村347 諫早421 長浦岳463 長崎501 絹笠山268 ここ1時間の雨量(ミリ) 大村42 長浦岳20 長崎13 絹笠山30 でまだ強い雨が降るから十分警戒を要する。(注 03:00現在の長崎の501ミリは23日00:00以降の雨量)</p> <p>4:00 ○1時間雨量3ミリ</p> <p>○県警察災害警備本部発表 災害状況 死者41人 行方不明者262人 孤立105人 その他</p> <p>4:30 ○大雨情報第8号</p> <p>04:00現在長崎県中南部を中心に強い雨が降り続けている。これまでの各地の雨量(ミリ) 大村369 五家原373 諫早448 長崎504 絹笠山339 島原227 口ノ津249 今後も強い雨が断続するので、引き続き警戒を要する。</p> <p>5:00 ○1時間雨量1ミリ</p> <p>○長崎海上保安部大雨災害対策本部設置(8月11日17:00解除 海上22遺体を収容)</p> <p>5:15 ○大雨情報第9号</p> <p>04:00背振山レーダー観測によれば、平戸-松浦方面と、大村-島原半島にかけて、それぞれ高さ10～15kmの強い雨雲がある。島原では04:00～05:00の1時間に65ミリの強い雨が降っている。今後も1時間30ミリ前後の雨が降るおそれがあるので、引き続き警戒を要する。</p>

5:30～ 11:00	災害救助法を多良見町、飯盛町、長与町、時津町、諫早市、三和町、琴海町、大瀬戸町、外海町に適用
6:00	○1時間雨量0ミリ
7:00	○1時間雨量1ミリ
8:00	○1時間雨量16ミリ（00:00～8時間雨量74ミリ） ○断水世帯約69,000戸に飲料水供給開始。給水車14台 給水船1隻で106m ³ 人員45人（8月10日までに延べ1,195台39隻で9,748m ³ 人員3,664人）
8:15	○大雨情報10号 07:40背振山レーダー観測によると、野母崎半島付近と、これから東に伸びる強い雨雲が停滞している。また別の雨雲は五島付近に斑在し、島原半島を中心に強い雨がまだ続いている。雨雲は停滞しているので、強い雨はまだ続くから、厳重に警戒すること。08:00までの総雨量（ミリ）は 平戸225 松浦226 佐世保217 長崎522
8:30	○長崎市災害対策本部会議（第1回）開催（7月26日より毎日08:00と20:00の2回開催）
9:00	○1時間の雨量5ミリ ○長崎市公会堂に身元不明者の遺体安置所を開設。遺体保存につき長崎大学医学部に協力方要請。（安置所は7月27日市民会館に移し、8月4日閉鎖） ○防疫活動開始 従事者10人（以後逐次増員 8月5日までに延べ1,431人 対象戸数24,510戸 伝染病の発生をみずに目的完了）
9:25	○大雨情報第11号 08:50背振山レーダー観測によると、一時弱まっていた雨雲が再び活発となり、島原半島から野母崎半島を通り、帯状に西に伸びている。このため県南部を中心とする強い雨は、しばらく続く見込み。また別の雨雲で長崎市・佐世保市付近に、1時間20ミリくらいの雨が降っているので、十分警戒を要する。
9:30	○避難所へ非常食を配給開始。 ○し尿緊急くみ取り申込み殺到。くみ取り作業開始。8月1日までにバキューム車・器材運搬車合計延べ975台（直営・衛生公社・下請・借上・応援車等）8月2日以降定期収集と併行。8月18日緊急くみ取りは大体完了。
10:00	○1時間雨量6ミリ
11:00	○1時間雨量4ミリ
11:10	○大雨情報第12号 10:40背振山レーダー観測によると、島原一熊本に伸びる雨雲の帯と、佐賀市付近から南西の線上に伸びる雨雲があり、その中に強い雨雲を伴って毎時40kmの速さで東へ移動中。このため長崎市から大村・諫早市付近と、島原南端から有明海にかけては、所々強い雨が降っている。10:00までの総雨量（ミリ）は 厳原 141 平戸227 松浦230 佐世保222 大村385 諫早438 長崎534 島原336
12:00	○1時間雨量5ミリ ○政府 災害対策関係省庁連絡会議開催 ○政府系金融機関 中小企業対策災害復旧資金貸付業務開始 ○家屋全壊世帯等に市営住宅の空き家への入居紹介業務開始（空き家170戸。これに県営住宅40戸と雇用促進住宅16戸が加えられ、計226戸となる） ○浜市商店連合会ほか7商店街代表より融資制度につき陳情 ○断水戸数67,400戸（給水戸数150,000戸に対し、断水率44.9%） 送水可能浄水場は手熊・道ノ尾・出雲だけ。給水車による給水を続行。（8月4日芒塚方面給水開始で、断水3,500戸、断水率2.3%となり、8月8日矢上・日見地区復旧で100%給水となる） ○ガス供給停止需要家戸数41,688戸。（ガス供給100%再開は8月2日。復旧作業動員の総人数1,167人、車両305台、うち現地要員は265人48台。あとは東京、大阪等全国からの応援であった。）
12:20	○大雨情報第13号 12:00背振山レーダー観測によれば、有明海一島原半島一長崎市付近一五島南東50kmの海上に達する、幅30kmの雨雲があり、その中の島原と長崎付近には12～13kmの高い積乱雲があって、東北東に25kmの速さで進んでいるので、所により強い雨がしばらく続く見込み。長崎市付近では、河川の増水や山崩れの起こるおそれがまだ残っているので注意を要する。12:00までの総雨量（ミリ）は（注 23日24時間総雨量と合計） 平戸229 松浦231 佐世保222 大村336 長崎市542 島原371
13:00	○1時間雨量4ミリ
13:30	○県営バス各ターミナル、営業所などを避難乗客に開放し、炊出しを開始 ○県議会各派代表者会議、議会運営委員会開催 ○県議会災害対策本部設置 ○県議会が災害現地（浜町一帯及び中島川流域）を視察

- 災害救助法適用市町に災害救助用備蓄物資の緊急輸送を開始
 - 救援物資の受付及び災害救助法適用市町への輸送を開始（総合福祉センターに集荷，区別，積み出し，29日から国際体育館を追加）
 - 断水した水道の応急復旧活動を開始
 - 医療機関の被害状況を調査
 - 県医師会に診療所の被害状況調査を依頼
 - 血液透析機関の給水状況を調査
 - 日赤，国立長崎中央病院に医療救護班の出動待機態勢を依頼
 - 救急医療に対応できる病院を調査，救急病院を確保（11病院が応需可能）
 - 長崎市及び周辺の病院に急患の受け入れを要請
 - 東長崎地区，戸石地区の救急医療を確保するため国立長崎中央病院などに協力を要請
 - 東長崎地区に医療の連絡のため駐在員1名を派遣（～8月2日）
 - 厚生省に対し医療金融公庫融資の特別扱いを要望
 - 県赤十字血液センターで保存血液不足が予想されるため献血協力を呼掛け
 - 国鉄，航路，空路，バス，島鉄などの運行状況を調査
 - 商店街の地下部分を排水するため排水ポンプ15台を緊急貸出し
 - 被災商店街等実態調査を実施
 - 銀行協会に対し罹災預金者の預金の取扱い，手形決済の期日延期などについての特別措置の実施を依頼
 - 県単独の「長崎大水害緊急対策資金」制度などの実施方針を決定
 - 雇用保険受給者の失業認定の便法を措置
 - 長崎港内に流出した木材の収集を開始
 - 県経済連に県内野菜の長崎向け出荷を優先するよう要請
 - 佐世保中央卸売市場に対し，野菜などの緊急確保対策を要請
 - 精米在庫量の調査及び米穀の配送
 - 家畜被害の現在調査及び畜舎の消毒（～8月5日）
 - 牛乳，卵の市内在庫調べ
 - 鶏卵及び牛乳の供給確保を依頼
 - 森林被害の大きい災害現地（長崎市鳴滝・奥山・川平・滑石）を調査
 - 川平地区の治山施設災害現地を調査
 - 道路，河川の応急復旧工事を開始
 - 災害住宅相談所の設置を長崎市に要請
 - 宅地造成規制区域及び開発許可区域の被災状況現地調査（～7月30日）
 - 県営バスの長崎市内線の一部（本原一丁目～市役所～中央橋，立神～旭大橋～県庁前，西泊～立神～長崎営業所）を運行
 - 自衛隊ヘリコプターの出動を要請。孤立地区への救援物資空輸のため。
- この日
- 政府 豪雨非常災害対策本部の設置を持ちまわり閣議で決定。本部長松野幸泰国土庁長官。（25日長官来県。災害地視察）
 - 公明党九州地区集中豪雨対策本部調査団（団長原田立党組織局次長以下8人）来崎。地元県議・市議と合流，4班に別れ，東長崎・川平・鳴滝・本河内奥山地区を視察。
- 14:00 ○1時間雨量1ミリ
- 15:00 ○1時間雨量0ミリ
- 15:10 ○陸上自衛隊ヘリコプターが物資を積載し，長崎市営陸上競技場から東長崎地区へ出動。以後連日活躍（物資空輸は8月2日まで続く。延べ76機。別に人員空輸延べ20機などあり）
- 市公会堂内遺体安置所の一隅を，通夜の場所として遺族に提供。この夜の通夜遺体8体。
- 16:00 ○1時間雨量1ミリ
- 16:40 ○大雨情報第14号
- 強い雨雲は一時天草付近まで南下していたが，再び北上している模様。このため島原地方では16:00までの1時間に10～15ミリの強い雨が降っている。明日は黄海付近に新たな低気圧が現れる。このため県南部の強い雨は，今夜は次第に北上して明日は県下全域とも大雨になるおそれがあるので，引き続き警戒を要する。今夜から明日までの降水量は100～150ミリ，所により200ミリ以上となる見込み
- 17:00 ○1時間雨量5ミリ
- 17:20 ○大雨洪水警報雷雨波浪注意報
- 16:00現在県の南部だけで降っている強い雨域は，次第に北上する見込み。また明日は次の低気圧が接近するため，全域とも大雨になるであろう。がけ崩れ・山崩れ・中小河川の氾濫・落雷等，さらに

	<p>大きな災害の起こるおそれがある。今後の降水量は100～150ミリ、所により200ミリ以上になる。また沿岸海上は波高2～3mになっているので、船は注意を要する。</p> <p>○鉄道気象通報 大雨が降る。(7月25日06:25解除)</p> <p>18:00 ○1時間雨量10ミリ</p> <p>18:20 ○県警災害対策本部が、土砂崩れ等による生理め箇所は長崎市内を中心に31か所と発表</p> <p>18:30 ○知事が新東京国際空港に日程を繰り上げ帰国(16:45)、福岡空港着(20:40)</p> <p>○県警災害警備本部及び現地災害警備本部は、山崩れ・がけ崩れ887か所、生理め47か所に出動して、被災者の救出、遺体の収容、交通整理、犯罪の予防に当たるほか、警備艇3隻を長崎港に投入し捜索に当たる</p> <p>○長崎県災害防疫対策本部設置(8月5日県災害対策本部防疫班に移行し、業務縮小)</p> <p>19:00 ○1時間雨量9ミリ(以後7月25日06:00まで0ミリ) 7月23日17:00以後26時間の総雨量571ミリ(同日09:00～1時間雨量1ミリを合計すれば572ミリとなる)</p> <p>19:40 ○大雨情報15号</p> <p>19:00背振山レーダー観測によれば、強い雨雲が熊本県にあり、その一部が島原半島や長崎半島の南部にかかっている。このため絹笠山では18:00までの1時間に58ミリの強い雨が降っている。県の北部・中部では小康状態になっているが、強い雨の区域はゆっくり北上する見込み。19:00までの総雨量(ミリ)は、平戸232 佐世保228 大村388 諫早492 長崎572 島原で416で十分警戒を要する。</p> <p>22:10 ○大雨情報16号</p> <p>22:00現在各地とも小降りとなっている。しかし野母崎西方40kmの海上に強い雨雲が現れた。このため長崎半島-西彼杵半島-島原半島にかけて、再び強い雨が降り出すおそれがあるので、警戒を要する。</p> <p>24:00 ○7月24日00:00～24時間雨量は124ミリ。23日24日48時間572ミリ。</p> <p>この日 ○県議会、災害対策本部を設置。現地視察。</p> <p>○共産党調査団来県。</p> <p>○救援物資、見舞金相次ぐ。おにぎり無料炊き出しの店、銭湯の無料開放も現る。学校や公民館など86か所の避難所に毛布、下着類配布。長崎市では2,800人が避難所暮らし。</p> <p>○104遺体収容</p>
7月25日(日)	<p>○知事が登庁(1:40)、部課長から被災状況の報告を受け、対策を指示</p> <p>○公明党視察団(大橋敏雄衆議院議員外)が来県</p> <p>○初村労働大臣が来県</p> <p>○県議会が被災現地を調査(長崎班、西彼班)</p> <p>○県議会が要望事項を理事者側に要請</p> <p>○海上自衛隊が活動を開始(輸送船により復旧用車両の長崎港搬送、生活物資輸送、給水支援など)</p> <p>○福岡県機動隊200人が応援のため到着、活動を開始</p> <p>○福岡県、佐賀県に給水車の応援を要請</p> <p>○漁業取締船「海王丸」を緊急物資輸送用に配備、更に全船に対し、緊急出動体制を確立</p> <p>○伝染病の発生に備え、長崎大学等に職員の派遣を依頼</p> <p>○救急医療に対応できる病院調査(13病院が応需可能)</p> <p>○東長崎地区の医療の協力を健保諫早病院などに要請</p> <p>○医療施設、薬局等の被災状況を調査(～26日)</p> <p>○外海町で救援船で消毒薬を輸送</p> <p>○各保健所の防疫体制を整備</p> <p>○要保護世帯(独り暮らし老人、母子世帯等)への対応について市町村を指導</p> <p>○土捨て場として長与、時津8工区埋め立て地を決定</p> <p>○ごみ、土砂の応急集積場所を指定(勝山小学校など16校グラウンド、神ノ島工業団地用地等6か所)</p> <p>○国鉄佐世保線復旧(17:00)</p> <p>○県営バスの長崎空港行を西海橋経由で運行</p> <p>○長崎空港行定期船(時津～空港)への県営バスの接続について調整(26日始発から運行)</p> <p>○政府県金融機関に対し、長期低利の緊急融資、既往融資の償還猶予等特別措置の実施を依頼</p> <p>○商店街地下室の排水のため農業排水用ポンプの借用を斡旋</p> <p>○被災地域の園芸施設、農作物、家畜などの被害について現地調査(～28日)</p> <p>○林野庁と林野災害の大きい地区の現地調査並びに今後の対策を協議(～26日)</p> <p>○森林被害の大きい東長崎地区を調査</p> <p>○災害住宅相談所の設置を飯盛町に要請</p> <p>○災害警備本部を県警察本部及び20警察署に設置</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ○道路決壊による通行禁止の措置を国道25か所、県道27か所、その他37か所で実施 ○マイカー自粛の広報活動を実施 ○県警がヘリによる被害調査、防犯広報を実施（～31日）
0:00	○大雨情報第17号 7月24日23:00背振山レーダー観測によれば、長崎の南西約40kmに高さ14kmの強い雨雲があり、発達しながら北東に進んでいる。この雨雲の通過で、長崎一島原半島は強い雨が降るおそれがあるので、警戒を要する。
1:30	○大雨情報第18号 01:10背振山レーダー観測によれば、島原半島南部と野母崎を結ぶ線に、高さ15km位の雨雲があり、口ノ津では01:00までの1時間に30ミリの雨を観測した。また野母崎の南西海上に強い雨雲が続いている。長崎半島一島原半島には、所により強い雨が降るおそれがあるので、十分警戒を要する。
3:40	○大雨情報第19号 03:00背振山レーダー観測によれば、強い雨雲はゆっくり南下し、島原半島の雨も小降りとなった。しかしまだその一部が残っており、1時間に10～20ミリの雨が降るおそれがある。引き続き、かけ崩れなどの災害を十分警戒のこと。
5:45	○大雨情報第20号 05:00背振山レーダー観測によれば、強い雨雲はゆっくり南下し、現在島原半島の南にある。このため長崎地方の雨は、次第に小降りとなったが、まだ南部を中心に、所によっては1時間に10～20ミリの雨が降るおそれ残っているので、かけ崩れなど十分警戒を要する。
未明	○高田知事、ブラジル訪問の日程を打ち切り帰任
6:00	○現在停電20,900戸（配電率89.8%）復旧工事は深夜も続行中。
6:25	○波浪注意報発表（大雨洪水警報雷雨注意報は解除）梅雨前線が南下し、雨は小降りになったが、海上は波が高く2～3mで、船は注意を要する。
11:00	○昭和57年7月豪雨非常災害対策本部政府調査団（団長松野幸泰国土庁長官以下17人）一行来崎。県庁で高田知事・鈴木県警本部長・本島長崎市長から、災害状況・被災者救助活動状況などについて説明を受け、知事らの案内で中島川周辺・中央橋付近商店街・川平町災害現地を視察。そのあとヘリコプターで市周辺被災地を上空から視察。金子・倉成・西岡3代議士同行。
この日	○日本社会党長崎等集中豪雨災害調査団（団長石橋政嗣党副委員長以下11人）一行来崎。主として市中心部の被災状況を視察。同党県本部も災害対策本部を設置。地元県議・市議が災害地対策に応じた。 ○民社党長崎豪雨災害現地調査団（団長宮田早苗党国民運動委員長以下4人）来崎。中島川周辺・鳴滝町の災害状況を視察、本河内町奥山地区を視察後、中央橋周辺・城山商店街・大橋町浦上警察署・本原町・川平町等被災地視察。
12:00	○浸水便槽緊急汲み取り受付を広報する。
12:30	○東長崎支所内に長崎市災害対策現地本部を設置 本庁派遣本部要員25人 応援職員80人 支所職員14人 計119人（8月21日解散） ○本島市長も東長崎地区視察。慰問と激励。
17:25	○波浪注意報発表 東シナ海に低気圧が近づいている。沿岸海上では次第に波が高くなるので、船は注意を要する。南寄りの風で、波の高さは2～3mの見込み。
20:00	○現在の停電は13,000戸（配電率93.6%、朝06:00より7,900戸減る）なお復旧の深夜工事続行。
この日	○ガスの復旧工事支援隊が、東京・大阪その他から大挙来崎。（福岡市の本社からはすでに24日12:30～15:30に来崎し、作業中）ガス供給停止戸数41,688戸（完全復旧は7月28日～8月1日） ○給水船8隻（民間借上1 ボランティア7）で日見・矢上・茂木地区への給水開始。（以後4～2隻） ○佐世保市その他県内各市町の給水車16台来援。（以後29～2台で8月3日まで1,316m ³ 給水） ○国鉄では水害救援物資無償輸送特別取扱（8月26日まで）を公告 ○県災害防疫対策本部を設置。 ○三ツ山町の原爆養護老人ホーム孤立、自衛隊が緊急輸送。孤立状態の矢上、茂木地区へも米の緊急輸送。 ○災害義援金受付開始。 ○雇用促進事業団、住宅30戸を提供。 ○県営バスの市内中央部ほぼ復旧。長崎バスも市内線中心に70%運転回復。 ○50遺体収容。
7月26日(月)	○天皇・皇后両陛下より御下賜金、皇太子・同妃両殿下よりお言葉を賜る ○神谷中小企業庁長官が来県 ○建設省「非常災害対策本部」が、中島川、浦上川を激特事業に指定することなどを決定 ○知事が被災地（東長崎地区）を視察

- 議長が自民党災害調査団に同行
- 知事が自衛隊第4師団長と対策を協議
- 知事が業界、各種団体を招き、要望を受け、復旧への協力を要請
- 知事が県婦人団体連絡協議会、県青年団連合会等に対し、ボランティア活動参加を要請、ボランティア活動開始
- 水産試験場調査船「わかづる」「ともづる」が海上保安部と連携し、長崎港内の行方不明者を捜索（～31日）
- 長崎市奥山地区に連絡要員とし
- 東長崎、茂木、外海地区に情報連絡のため職員各3人を派遣（～8月1日）
- 雲仙農協から被災地（長崎地区）へ「にぎりめし」の救援
- 米を茂木港から千々へ海上輸送
- 生鮮魚介流通対策協議会を開催し、水揚量の確保、輸送対策などについて協議
- 市成人病センターの血液透析の患者を長崎大学付属病院にピストン輸送
- 救急医療に対応できる病院調査（16病院が応需可能）
- 血液透析機関の対応状況調査
- 救急医療機関及び血液透析機関の給水状況を調査
- 公的病院及び民間病院に対する給水状況を調査
- 茂木地区に医療連絡のため駐在員を派遣（～8月1日）
- 緊急防疫のため噴霧器を斡旋
- 防疫体制について県と長崎市との地区割りを決定―県担当は東長崎地区、茂木地区、日見地区、ごみ集積地、主要幹線道路
- 長崎市築町を緊急消毒
- 茂木地区の防疫指導及び緊急消毒（～30日）
- 伝染病予防ビラ15,000枚を作成
- 県菓種商協会から被害状況報告
- 廃品仮投棄場所5か所（臨海部）に指導監督要員として職員計32人を派遣（～30日）
- 応援によるし尿収集活動開始（南高、東彼地区のし尿処理一部事務組合、県環境保全協会、県環境整備事業協会同組合等）
- 県経済部調査による商工業関係の推定被害額は約950億円の見込みと発表
- 緊急輸送車両の緊急表示ステッカーの交付を開始
- 国鉄大村線が早朝から運行を再開
- 国鉄松浦線は一部（佐世保～松浦、伊万里～有田）で折り返し運行（27日12:00全線開通）
- 島原鉄道の北線が運行を再開（15:00）
- 県営バスの長崎空港行を時津から船便に接続運行（～29日）
- 商工会議所連合会等商工団体に対し、被災者に対する相互救援活動等の実施を要望
- 商店街地下部分の排水のため農家の排水用ポンプの借用を斡旋
- 長崎市内各地区商店街などの代表者から災害復旧について要望
- 労務者確保のため長崎市内大規模事業所の出勤状況調査を実施
- 失業対策事業による災害復旧を実施（～8月10日）
- イネ白葉枯病注意報、果樹予報を発表
- 鶏卵産地地区の鶏卵業者に対し、鶏卵の供給確保の協力を依頼
- 県食肉事業協同組合連合会に対し、食肉の供給確保を依頼
- 県プロイラー協会などに対し、プロイラーの供給確保を依頼
- 家畜死体の処理並びに消毒
- 川平・大橋団地の災害復旧工事を開始
- 廃品仮投棄場所、土砂捨場等として県有港湾施設を開放することに決定。このことについて報道機関と民間の協力を要請
- ガス施設復旧応援車両のため小ヶ倉岸壁用地を無料解放
- 県の各地方機関に住宅相談所を設置
- 長崎市が住宅相談所を設置
- 災害復旧、避難のため学校施設の開放を斡旋
- 高校生のボランティア活動が教育活動の一環として始まる
- 国際体育館の部分復旧作業開始
- 災害警備本部は県警察本部及び7警察署に設置
- 長崎市の交通渋滞解消のため交通警察官による整理、誘導（～27日）

	<p>○長崎市内の被災者救援、復旧作業のため交通総量抑制対策を推進</p> <p>○県警災害相談センター（12名体制）を設置</p> <p>○県警本部災害警備本部が22:00現在の被害状況を発表（死者227人、行方不明者94人、負傷者273人、家屋全壊189戸他）</p> <p>6:00 ○大雨洪水雷雨波浪注意報発表 対馬付近に低気圧があり、中心から南西に伸びる前線が近づいている。このため北部ではまもなく、南部では昼前に、雷を伴った強い雨が降るおそれがある。かけ崩れや中小河川の増水、落雷などに注意を要する。雨量は20～30ミリ。所によっては70ミリの見込み。沿岸の海上では、波の高さは2mくらいになっているから、船は注意すること。</p> <p>○停電2,500戸（配電率98.8%）に減る。</p> <p>9:00 ○日見支所内に長崎市災害対策現地本部設置。本庁派遣本部要員12人 応援職員10人 支所職員7人 計29人（8月21日解散）</p> <p>○茂木支所内に長崎市災害対策現地本部設置。本庁派遣本部要員6人 支所職員7人 計13人（8月21日解散）</p> <p>この日 ○自民党災害調査団（团长古賀雷四郎党政調副会長・党災害対策本部副本部長以下5人）来崎。中央橋周辺・浜町・鳴滝町・川平町・芒塚町・矢上町など被災地を視察</p> <p>10:00 ○知事は佐世保地方総監に対し海上自衛隊給水船の災害派遣要請。茂木地区・伊王島に給水。</p> <p>15:00 ○電車 赤迫一築町、赤迫一桜町一壘茶屋の両系統運行開始。あとは不通のまま。</p> <p>16:00 ○通信指令室に「災害相談110番センター」設置。8月23日までに12,477件受理</p> <p>○若菜丸で長崎港から茂木港へ救援物資を輸送。</p> <p>19:00 ○矢上・茂木地区にも送電。本河内町奥山地区（27日19:00送電開始）を除き電気完全復旧。</p> <p>○災害ごみの収集開始。（～8月10日）</p> <p>○住宅金融公庫災害復興住宅資金貸付業務開始。</p> <p>○全壊家屋世帯に県営住宅空き家（40戸）への入居斡旋業務開始。（市営住宅170戸と合計210戸）</p> <p>○諫早市より市職員21人 消防団員81人来援。出雲町・戸町3丁目の生き埋め現場で救出作業。</p> <p>○福岡市その他県外各市町の給水車27台来援。（以後26～27台で7月31日までに913m³給水）</p> <p>○海上自衛隊給水車1台来援。（翌27日まで80m³給水）</p> <p>○県警機動隊給水車2台来援。（以後8月3日まで177m³給水）</p> <p>○陸上自衛隊給水車5台来援。（以後32～17台で7月30日まで571m³給水）</p> <p>○本河内水系復旧</p> <p>この日 ○月曜日を迎え官公庁、企業は平常活動開始するが交通機関のストップで通勤の足は大幅に乱れる。一方、市民生活はガス、水道のストップで缶詰、カップめんが飛ぶような売れ行き。このころから、一般のボランティア活動が相次ぐ。</p> <p>○長崎市内の電話は東長崎、茂木地区を除いてほぼ復旧。</p> <p>○市内電車運行開始。</p> <p>○長崎市中央卸売市場のセリ再開。</p> <p>○県、生活関連物資の緊急調査。品薄の野菜類の値上がりを除き、便乗値上げなし。</p> <p>○し尿、ゴミ収集深刻に。商店街や路上に積まれた汚泥、廃棄物が悪臭を放つ。市清掃車70台のうち60台が冠水で故障。市町村、業者に対しし尿収集応援要請。県トラック協会にゴミ搬出の応援依頼。</p> <p>○55遺体収容。</p>
7月27日(火)	<p>○知事が長崎市役所を見舞い、市三役と対策を協議</p> <p>○知事がヘリコプターで長崎市及び周辺部を視察、外海町、大瀬戸町、茂木地区に降下し見舞い</p> <p>○知事が被災地（奥山地区、鳴滝地区、市中心部）を視察</p> <p>○通産大臣、中小企業庁長官、福岡通産局長等に対し、中小企業者に対する特別措置の実施と要望</p> <p>○県災害対策本部総務連絡部の分室を総務部長室に設置（職員2人、24時間体制）</p> <p>○被害の大きい長与町、時津町、多良見町、琴海町、飯盛町の各災害対策本部に情報連絡のため職員各2人を派遣（～29日、飯盛町は30日まで）</p> <p>○東長崎災害対策現地本部に連絡要員として職員を派遣</p> <p>○長崎市西山木場地区に情報連絡のため職員2人を派遣（～29日）</p> <p>○鳴滝地区、川平地区、本河内奥山地区に情報連絡のため職員2人を派遣（～31日）</p> <p>○日本水難救済会島原救難所では救援物資輸送のため、島原港から長崎港へ緊急出動</p> <p>○日本消防協会が緊急給水用之水機10基を県災害対策本部に贈る</p> <p>○道路公団（バイパス）、建設省（国道34号）が県警本部に長崎市内に入る生鮮食料品等輸送車両について交通規制の一部緩和を申し入れ（28日早朝から通行可）</p> <p>○生鮮食料品緊急輸送車としてバイパス、国道34号を通過できる車両200台を承認</p> <p>○日見地区に医療の連絡のため駐在員1人を派遣</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ○日赤県支部が東長崎地区などで本格的救援活動を実施 ○九州郵政局簡易保険郵便年金事業団から医療救護班の派遣申し出 ○福岡県、佐賀県に防疫派遣を要請 ○緊急消毒（長崎市築町、中央橋、寺町、万屋町） ○東長崎地区を緊急消毒（～31日） ○茂木地区に消毒薬を搬送 ○ごみ集積地の小中学校校庭9か所、神ノ島等埋立地5か所及び幹線道路の消毒（～8月5日） ○応援による、ごみ、土砂等の収集活動を開始（1市15町で造園業協会、トラック協会、自家用自動車協会、自衛隊等8月5日まで延べ636台） ○県建設業協会、県トラック協会、県自家用自動車協会に対し災害復旧の協力を要請 ○道路、住宅等の堆積土砂、ごみの排除作業を開始（長崎市浜町、浦上地区、東長崎地区（～30日）） ○橘湾周辺漁協の出荷体制について協議 ○長崎市奥山地区の救援自衛隊からの要請によりチェーンソーの借用を斡旋引渡し（～28日） ○長崎中央卸売市場の市内への仮設移転を検討（28日国際体育館の駐車場は緊急物資保管場所に利用するため、仮設移転を断念） ○農薬が流出した場合の危被害防止について全病害虫防除所、全普及所に指導徹底を指示 ○市町村立学校の被害校（26校）の災害応急復旧工事に着手（～8月31日完了） ○災害警備本部は県警察本部及び5警察署に設置 ○道路損壊等により79か所で全面・片側・大型車両通行禁止等の交通規制を実施 ○断水地区住民の洗濯場として学校プールを開放。 ○り災証明書発行事務を開始（中央・北両消防署と東長崎支所） ○全壊家屋世帯に雇用促進住宅空き家（16戸）の入居斡旋業務開始。（市営住宅170戸県営住宅40戸と合計226戸） ○長崎海洋気象台は今回の大雨の名称を「昭和57年7月23日から25日にかけての梅雨前線による長崎県の大雨」と決定。気象庁は明28日「昭和57年7月豪雨」と命名。 ○長崎大学、7.23長崎大水害学術調査団（団長、伊勢田哲也工学部教授、28名）を編成、原因究明へ。 ○国鉄、長崎本線（市布経由）の運行開始。 ○浜市アーケード街で冠水品の投げ売り。靴やバッグなど100円、500円に主婦殺到。 ○西部ガス長崎支店、開栓作業開始。市内で約4万戸がストップしていた。 ○県が中小企業に対し単独で緊急対策融資制度創設。総額30億円。8月10日から受付開始。 ○国鉄、九州商船、救援物資の無料輸送開始。福岡応援隊給水開始。 ○16遺体収容。 13:00 ○神谷和男中小企業庁長官来崎。県庁で三村副知事・清島県商工会議所連合会会長から陳情を受け、市内商店街の被害状況視察。 14:00 ○箕輪 登郵政大臣来崎。長崎中央郵便局その他を訪れて職員を激励。県庁・市役所を訪問。 18:00 ○遺体安置所を市公会堂から市民会館へ移設。（8月4日閉鎖） 19:00 ○本河内町奥山地区にも送電。これで全市完全復旧。
7月28日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ○ローマ法王から水害による犠牲者の安息を祈るメッセージが届けられる ○議長が衆議院災害対策委員会一行に同行 ○知事が被災地（琴海町、時津町、長与町、多良見町、諫早市、飯盛町）を見舞い及び視察、長崎市滑石地区を視察 ○議長が矢上、戸石、古賀、外海町の被災地をヘリコプターで視察 ○福岡県管区機動隊及び佐賀県管区機動隊218人が到着。福岡県機動隊は交替して帰県 ○農地等の被災市町村（1市8町）に職員25人を派遣（～31日） ○御手洗水地区に情報連絡のため職員2人を派遣（～29日） ○被災地での防疫業務の応援のため職員12人を派遣 ○日見地区を緊急消毒（消毒班ヘリコプター輸送31日まで） ○福岡県、佐賀県から防疫の応援のため来県、防疫活動を開始（～8月3日延べ66人） ○長崎市内臨時対応地区（鳴滝、滑石、八幡町、奥山地区）を消毒 ○東長崎、茂木、日見地区の防疫を実施 ○長崎市民病院医療救護班が東長崎地区に常駐（医師3人、看護婦5人） ○救急患者受け入れ病院への給水車派遣 ○長崎市内のし尿処理のため組合、業界によりし尿収集車を配車（～31日延べ56台） ○緊急ステッカーの交付を停止し、県警へ引き継ぐ一法規制となる ○緊急輸送車輛確認証明書の発行（緊急ステッカーの交付）は公用車、物資輸送車のみとする

	<ul style="list-style-type: none"> ○島原鉄道南線の一部（南島原～西有家）で折り返し運行 ○長崎市、周辺町に対して災害復興住宅資金の貸付け等の説明会を開催 ○戸石地区の養殖業の弊死に伴い漁場の水質等を調査 ○県内の農林被害は373億円と県災害対策本部が発表 ○病虫害対策について文書指導 ○畜舎、鶏舎の消毒（継続して実施） ○災害住宅相談所の設置を外海町に要請 ○高校生のボランティア活動開始（～8月28日、県立高校8校延べ1,093人、私立高校9校延べ597人） ○災害警備本部は県警察本部と6警察署に設置 ○マイカー通勤の長崎市内乗り入れ自粛の呼び掛けのピラ16万枚を作成、機関、団体等に配付し、新聞折り込みで家庭に広報 ○長崎市議会全員協議会開催 ○衆議院災害対策特別委員会の長崎集中豪雨災害調査団（団長川俣健二郎委員長以下21人）来崎。調査団は同特別委員会の8人と文部・厚生・農水・建設各省、国土庁・警察庁・中小企業庁・消防庁などの担当者ら13人で編成。一行は三村副知事の案内で浜町商店街・眼鏡橋・御手洗水・鳴滝町・川平町などの災害現場を視察。 ○日本共産党長崎大水害国会議員調査団（三浦久・小沢和秋両代議士）来崎。地元県議・市議と合流、本河内奥山・川平・東長崎地区を視察。翌29日県庁訪問、三村副知事に救援対策を要請。（24日来崎中であった同党荻輪幸代代議士も、地元県議同道、高田知事・本島市長に緊急対策の要請をした） ○県警国道34号長崎バイパス交通規制を開始。昭和町－西彼多良見町市布名間11.1kmは、災害復旧関係車両を除き、一般車両の通行禁止。13:00より。（8月1日タクシーは解禁。災害緊急輸送道路に。） ○県は中小企業向けに長崎大水害緊急対策資金貸付制度を創設 ○り災証明書の発行業務を日見・茂木両支所で開始。 ○東長崎地区に救護班（医師3人・看護婦5人）を派遣。（8月12日まで） ○長崎市内の高校生、長崎復興にと一斉に市内に出動。個人や建設会社もジープ、小型トラックでゴミ搬送のボランティア盛ん。 ○応急仮設住宅100戸の建設を決定。 ○35遺体を収容。
7月29日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ○災害救助法の適用期間を延長 ○中日友好協会（廖承志会長）から知事あてに見舞い電報が届く ○知事が被災地（三和町、芒塚、長崎市中心部）を視察 ○無償提供の救援活動ヘリコプターが到着（8月2日まで運航） ○国際体育館を救援物資の置場として提供を開始 ○被災地での防疫業務の応援のため職員16人を派遣 ○長崎市内臨時対応地区（鳴滝、川平、銅座、城山、西山地区）を消毒 ○茂木地区検病調査、集団保健指導及び手洗いなどの消毒薬配付（～30日、1,458世帯） ○島原鉄道の全区間で運行を再開 ○激甚災害の指定を要請するための実態調査等を実施（調査事業所1,543か所） ○流出した雇用保険関係諸票を事業主及び雇用保険受給者に再交付 ○被災事業所を対象に労働保険料の納付を猶予 ○各地区農協から被災各地へ「にぎりめし」の救援（～8月2日） ○牛乳、食肉、鶏卵、小売店の被災状況を調査 ○林野庁と林野被害地区の現地調査及び対策協議 ○応急仮設住宅を発注（大瀬戸町） ○救援物資の輸送、配分業務の応援のため職員10人を国際体育館に派遣 ○日本育英会奨学生の追加採用措置について各高等学校長に通知 ○県営バスの女の都入口～中央橋～道光間の運行を再開 ○災害警備本部は県警察本部と7警察署に設置 ○燃やせるごみの定期収集を一部車両通行可能区域から開始。 ○県警国道206号一部202号の交通規制。一般車両の通行禁止。マイカー自粛の呼び掛け奏効せず、災害復旧に支障のため。通勤のマイカーなどが国道脇の道路に殺到、長崎市内をはじめ市周辺部でも通勤ラッシュと重なり大混雑。 ○県制度融資に伴う被害証明書の発行事務開始。 ○諫早市救援隊122人、巡視船「かばしま」で海路長崎入り。孤立の茂木地区へ。 ○長崎市川内町で地区合同葬。

	<ul style="list-style-type: none"> ○通勤通学の輸送確保のため定期バスの長崎バイパス通行認可。 ○13遺体を収容。
7月30日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ○議長が自民党調査団に同行 ○便乗値上げ防止のため生活関連物資等の価格状況を調査 ○救援物資の輸送、配分業務の応援のため職員10人を派遣 ○被災地での防疫業務の応援のため職員16人を派遣 ○長崎市内臨時対応地区（本河内町、春木町、銅座町）を消毒 ○茂木北浦公民館に健康相談所を開設 ○長崎市内のごみ量調査のため職員4人派遣 ○長崎バイパスの朝夕の通行規制緩和に伴い、7:00～9:00及び17:00～19:00の間に限り長崎～諫早・矢上方面のバス便は各社ともバイパス経由で運行 ○国鉄長崎本線長与経由の一部（長崎～大草）で折り返し臨時運行 ○雇用保険法により求職者給付の支給特例を国に要望 ○橘湾を中心に流木等が散乱し漁船の航行、操業に支障を来たすため、補助事業による海面清掃を国に要望 ○養殖魚の病害発生に関する注意報を発表 ○長崎市中央卸売市場を開場、国道34号の早期復旧を図るため休場日を決定 ○家畜衛生状況を確認し、家畜防疫を指導（～31日） ○仮設建築物に対する制限の緩和を承認（対象2市8町） ○長崎市の住宅の応急修理、障害物の除去は県で実施することを決定 ○応急仮設住宅を発注（三和町、琴海町） ○水害により流出又は汚損した児童生徒の教科書の確保について、市町村教育長、国・私立小中学校長等あて文書発送 ○被害高等学校生徒に対する授業料免除措置について各高等学校長に通知 ○「県政写真ニュース」はレイアウトを全面組替え災害関係報道として発行 ○「県民のひろば」（長崎新聞）に災害関係について県からのお知らせとお願いを掲載 ○2遺体を収容 ○水害相談コーナーを市役所本館5階大会議場に設置。災害復旧・融資・弔慰金・援護資金貸付・税の減免・清掃・衛生・生活必需品の相談業務。 ○浦上水系（断水32,000戸）茂木水系（断水1,500戸）復旧。 ○自民党の西日本集中豪雨等災害対策本部調査団（団長二階堂進幹事長・同本部長以下15人）来崎。知事の案内で、中島川周辺・本河内町奥山地区・芒塚等を視察。あとヘリで北高飯盛町・西彼長与町などを上空から視察。 ○郵政省は水害救援物資の無償輸送特別取扱いを開始（11月10日まで） ○中島川のはんらんで冠水した長崎市公設の築町市場（72店舗）が営業開始。 ○復旧作業で犠牲者。東長崎地区で被災家屋解体の手伝いをしていた田中篤さん（54）が落ちてきた材木で頭を打ち死亡。
7月31日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ○議会運営委員会開催 ○知事が被災地（日見トンネル一帯）を視察 ○県災害対策本部がまとめた30日現在の被害総額は1,989億円と発表 ○福岡県管区機動隊及び佐賀県管区機動隊が帰県 ○被害市町村（該当27市町村）に対し普通交付税の繰り上げ交付を決定（交付8月2日） ○救援物資の輸送、配分業務の応援のため職員10人を派遣 ○網場プールを地域住民の洗濯場に開放 ○被災地での防疫業務の応援のため職員22人を派遣 ○日見地区検病調査、集団保健指導及び手洗いなどの消毒薬配付（～8月5日、1,219世帯） ○日見地区に自治会長宅に健康相談所を臨時に開設 ○矢上地区検病調査、集団保健指導及び手洗いなどの消毒薬配付（～8月5日、2,274世帯） ○東長崎地区の検病調査 ○長崎市内臨時対応地区（本河内地区）を消毒 ○廃品仮投棄場所及び土砂捨場として更に神ノ島工業団地の一部を開放することを決定 ○東長崎地区のごみ量調査のため職員6人を派遣 ○長崎バイパスが終日通行可能となり、長崎からの郊外線の各社バス便はバイパス経由で平常どおり運行 ○トラック、タクシーの長崎バイパス乗り入れについて県警察本部に申請（3トン以上のトラックは毎

	<p>日12:00～4:00、タクシー、バスは終日通行可)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国鉄長崎本線の市布経由で平常運行のほか臨時列車を運行（～8月4日） ○被災低所得勤労者住宅復旧資金の特別融資を措置 ○県単独の豪雨被災農家経営安定資金を創設し、県災害応急対策資金の融資及び自作農維持資金の利子助成の活用を併せ措置 ○ヘリコプターにより林野被害地区の災害調査 ○応急仮設住宅を発注（時津町、長与町） ○戸石・三重・太田尾・飯香浦など簡易水道水系復旧。 ○西部ガスの供給停止41,688戸を対象に、28日から開栓作業に入り、本明日で全面復旧。 ○救護班4班（各班医師2人・保健婦2人）を川平・鳴滝・大浦・出雲・本河内奥山各地区に派遣。 ○国鉄長崎本線の長与経由が始発から正常ダイヤに。8日ぶりの全線開通。 ○被災ゴミの一時搬入先となっていた小、中学校グラウンドの撤去作業に陸自出動。 ○諫早長田地区婦人会や長田農協婦人部が1,000人分のおにぎり炊出し。海自大村航空隊の大型ヘリで被災地へ。 ○長崎市、応急仮設住宅の入居者募集。 ○救援活動を続けていた陸自、ゴミ撤去班を除いて引揚げ。被災地入りした隊員は福岡、大分などの応援を含め最高時3,320人。延べ動員は18,340人。生埋め者の救出、断水地区への給水、孤立地区への救援物資のヘリ輸送などに夜を徹しての活躍。 ○県警機動隊アクアリング部隊、長崎・佐世保潜水協力員の協力で本河内水源池、東長崎八郎川河口で捜索活動。水没車両を多数発見。 ○2遺体収容。
8月 1日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ○林野庁と浦上川系、中島川系、日見川系、八郎川系等甚大な被害地区の現地調査 ○日見地区に情報連絡のため職員3人を派遣 ○救援物資の輸送・配分業務の応援のため職員10人を派遣 ○戸石・古賀地区の検病調査、集団保健指導及び手洗いなどの消毒薬配付（～5日、1,338世帯） ○県政番組「県民のひろば」（NBCテレビ）、「県政の窓」（NBCラジオ）に知事、議長が出演、長崎大水害の今後の対策を語る ○長崎市川平地区で遺体捜索の地元住民の要望により落石を爆破 ○生活必需品相談コーナーを市役所本館玄関コーナーに設置。 ○国道34号長崎バイパスの交通規制（7月28日）一部緩和。タクシーの通行解禁。 ○長崎市中小企業災害復旧特別資金融資制度を創設。 ○海上自衛隊引き揚げ。延べ動員291人。ヘリコプター26機、給水車3両、給水船5隻。
8月 2日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ○知事が県議会全員協議会で被災状況及び対策を説明 ○建設省道路局長が来県 ○林野庁林業試験場が土石流調査のため災害現地調査（～5日） ○農地災害等緊急査定設計書の作成のため被災市町村に県職員25人、土改連職員12人を派遣（～8月12日） ○救援物資の輸送・配分業務の応援のため職員10人を派遣 ○市成人病センターで血液透析を再開 ○長崎市内の食肉小売店の巡回指導（供給体制に支障がないことを確認） ○激甚災害指定のための実態調査結果を中小企業庁に電話報告 ○農林業関係県単独融資の資金需要額を調査 ○県育英会奨学生の追加採用措置について、各高等学校長に通知 ○参議院災害対策特別委員会の長崎大水害調査団（団長福岡知之同委員会委員長以下11人）来崎。東長崎地区等視察。 ○燃やせるごみ収集を定期収集へ移行。（市内の一部では家庭ごみは7月29日から実施済み。燃やせないごみは8月11日から） ○農地関係り災証明書発行事務を開始。 ○し尿の収集を一部緊急汲取区域を残したまま定期収集へ移行。 ○観光長崎も大打撃。旅館・ホテルのキャンセル相次ぎ、県観光連盟は緊急合同部会を開き対策協議。 ○孤立していた長崎市茂木地区へ小型車の通行可能。 ○県議会全員協議会開催。 ○1遺体収容。
8月 3日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ○知事が九州地方建設局長と対策を協議 ○知事がヘリで島原・南高地区を視察、布津町、北有馬町、加津佐町、小浜町に降下し見舞い

	<ul style="list-style-type: none"> ○各地港湾内に一時集積の災害ごみを埋立地等に搬送処理（～9月15日） ○被災現地（長崎、諫早、大村、西彼）を調査し、被災畜産農害の復興計画を検討 ○日見地区へ救護班（医師1人・看護婦1人）派遣。（8月8日まで） ○国道34号長崎バイパスの交通規制（7月28日実施。8月1日タクシー解除） 大型自動車（マイクロバスを含む）が全面解禁。 ○市制度融資に伴う被害証明書発行事務を開始。 ○県制度資金「長崎大水害緊急対策資金」の貸し付け開始。 ○長崎市本河内町奥山で避難中に2歳になる長女を濁流に奪われた末永幸枝さん（24）が男児出産。被災者を勇気づける。 ○奥山地区、北高飯盛町補加地区で合同葬。 ○1遺体を収容。
8月 4日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ○長崎市内路面電車の5系螢茶屋～石橋全区間を運行 ○被災地管轄事務所（長崎・大瀬戸土木事務所）及び被災町（琴海町ほか8町）に土木技術職員を応援派遣（9月末又は10月末まで継続） ○橘湾漁業振興対策協議会開催（湾内の海面清掃について協議） ○長崎港元船地区の災害復旧工事（泊地浚渫工事）を開始（～8月31日） ○県下農業共済組合参事会で水稻被害に対し農業共済金の概算払いの実施を決定 ○県災害対策本部による被害総額は4日現在で3,046億6,600万円と発表 ○茂木地区（宮摺・大崎・千々）へ救護班（医師1人・看護婦1人）を派遣。 ○市長各省庁へ陳情のため上京。 ○住民団体の中島川を守る会、中島川まつり実行委員会が中島川復興委を発足、洪水調査に乗り出す。石橋群の復興論活発に。 ○高田知事、ボランティア活動をねぎらう。この日まで、参加したグループは一般が19団体約8,090人、夏休み返上の高校生330人（県社会課調べ）。
8月 5日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ○災害救助法適用期間を再延長 ○生活関連物資等の価格状況を調査 ○県災害防疫対策本部は災害後の伝染病その他の発生もないとみて安全宣言を発表し、解散 ○諏訪神社の秋の大祭「長崎くんち」は予定どおり開催することを決定 ○林道災害復旧の現地指導のため職員を被災市町に派遣（～12日） ○県が応急的に対応していた長崎市の住宅の応急修理、障害物の除去について市が補助実施することに決定 ○県営バスの江の浦線が復旧し矢上～江の浦間を運行 ○陸上自衛隊が撤収（8月5日現在、延べ18,879人、ヘリコプター49機、ダンプカー180輛） ○2遺体を収容 ○「県政写真ニュース」災害特集号1を発行 ○市営体育施設・学校体育施設・市民木鉢プール・学校プール開放。（市民総合プール・祝捷山運動広場は8月10日から） ○県・市制度融資に伴う被害証明書の発行事務を、東長崎・茂木・三重の3商工会現地窓口で開始。 ○高田知事、本島長崎市長、初村県議会議長ら上京し、政府、自民党、県選出国會議員に災害復旧要望。 ○長崎市芒塚町の合同葬。 ○文化庁、中島川に架かる国指定重要文化財・眼鏡橋の復元、保存のため現地調査。 ○橘湾海域の海面清掃実施。湾内15漁協の漁船75隻、組合員300人が出て、同日だけで約35トンの流木回収。
8月 6日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ○国道34号交通の回復に伴い長崎市中心卸売市場の営業方針を出す ○被災現地（12市町村）で家畜疾病の発生予察調査及び予防対策指導を実施（～8月20日） ○河川激甚災害発生報告書を国に提出 ○長崎市からの委託により災害現場（長崎市内の鳴滝・芒塚・宿町・奥山・川平・東長崎侍石地区）の堆積土砂排除工事を実施（～9月6日） ○高校生ボランティアにより中島川周辺、松山陸上競技場周辺のごみの除去作業実施（長崎女子商業高校生徒200人、長崎南山高校生徒350人） ○県警のアクアラング隊が浦上水源池で捜索活動 ○防疫作業が成功裡に終了。本日から第2次防疫活動に移行。ごみ集積場となった小中学校々庭や臨海埋立地の堆積ごみの消毒・殺虫・防臭。カとハエの駆除。その他特に要望のあった場所の消毒・殺虫など、防疫の完べきを期す（8月28日完了）。水害による消化器系伝染病患者の発生はないとする安全

		宣言が、昨8月5日県から発せられた。 ○商店街の仮開店の状況 浜市商店街76%、浜市観光通り商店街64%、かじ市商店街61%、東長崎地区商店街36.7%、なお全面開店するためには、中心商店街では30%が、東長崎地区では47%が1ヶ月以上を要した。
8月 7日(土)		○応急仮設住宅への入居開始 ○長崎市内へのマイカー乗り入れ自粛についてテレビ広報 ○うら盆帰省に伴うマイカー自粛について関西以西の各府県道路情報センターに広報依頼 ○県政番組「明日のながさき」(KTNテレビ)に経済部長が出演、今後の経済対策を語る ○始関伊平建設大臣09:50長崎空港着。ヘリコプターで北高飯盛町・東長崎・国道34号・茂木・中島川・浦上川流域など上空から視察。県庁で高田知事・本島市長から災害状況の説明や要望を受ける。午後マイクロバスで中島川・芒塚周辺の災害地を視察。 ○長崎市、災害弔慰金の支給開始。
8月 8日(日)		○県政番組「県民のひろば」(NBCテレビ)、「県政の窓」(NBCラジオ)に経済部長が出演、今後の経済対策を語る ○鈴木善幸内閣総理大臣、明9日の平和祈念式典出席のため来崎。自衛隊ヘリコプターと公用車の乗り継ぎで、鳴滝・川平両地区の視察。現地では犠牲者の霊に花束を捧げ、被災者を慰問激励し、その後、恵の丘長崎原爆養護ホームを慰問した。 ○秋山長造参議院副議長来崎。災害地視察。 ○応急仮設住宅2戸本河内地区に着工(8月16日竣工)。最終的には4地区に8戸建設。 ○矢上(長竜寺)水系2,850戸水道復旧を最後として、17:00全市給水完全復旧。 浄水場の冠水や送水管の破裂などでピーク時7万世帯が断水していた。被害総額は17億5,000万円。
8月 9日(月)		○被災現地のアフターケアのため職員を派遣 ○被災住宅の応急修理のため被災地(長崎市奥山・草住地区)の現地調査 ○宅地造成規制区域内の被災地(長崎市滑石1丁目)の現地調査 ○気象庁が長与町の1時間降水量187ミリ(7月23日19:00~20:00)は観測史上第1位であることを正式確認 ○仮設大井手橋開通。(芋原橋は8月13日) ○この日長崎は原爆の日。水害で死亡した児童、生徒、先生たちは県内で36人で、同日の原爆登校日には犠牲者をしのぶ会が各校で行われる。 ○大雨洪水雷雨注意報の発令で二次災害を警戒。
8月10日(火)		○林野庁に依頼していた学術調査団による現地調査開始(～14日) ○緊急災害救助費、応急災害復旧費など総額136億3,900万円の一般会計補正予算を知事専決 ○国道34号の渋滞緩和策として長崎市内の岩屋橋交差点から昭和町交差点間の交通信号機のタイム調整を実施 ○住宅相談及び災害認定業務のため長崎市災害対策本部に職員を派遣(～12日) ○「県民のひろば」(長崎新聞)に県に義援金を寄せられた方々の氏名を掲載
8月11日(水)		○長崎市内路面電車の全区間を運行 ○復旧道路の安全対策として主要地方道、長崎長与線の一方通行規制を実施 ○林野庁による緊急治山事業計画査定 ○林地荒廃防止施設災害復旧事業現地査定(松浦市) ○農林業災害関係融資制度等説明会を開催 ○「県政写真ニュース」災害特集号2を発行 ○燃やせないごみの定期収集開始。これで家庭ごみの定期収集が軌道にのる。 ○長崎市川平町で合同葬。 ○長崎市議会各派代表者会議は総額110億円に上る災害復旧費などの補正予算の本島市長の専決処分を了承。 ○長崎新聞社は県内外から本社に寄せられた義援金の第二次分5543万7516円を県と市へ贈る。第一次分と合わせて総額1億3,040万7,465円に。
8月12日(木)		○飯盛町、外海町で応急仮設住宅の竣工検査 ○長崎市青年神職会、長崎大水害鎮水祭並びに復興祈願祭を中島川河畔で行う。 ○長崎市三川町の住民代表、市にかけ崩れによる二次災害防止を陳情。
8月13日(金)		○建設省の要請により、佐賀県から長崎市までの国道34号災害復旧緊急資材の運搬車輛を誘導 ○「県民のひろば」(長崎新聞)に県に義援金を寄せられた方々の氏名を掲載
8月14日(土)		○県政特別番組「明日のながさき」(KTNテレビ)に生活福祉、環境、農林、土木各部長が出演、今後の対策を語る

		○長崎市水道局、道ノ尾水系を除く市内全世帯に対し、にぎり水や赤水で迷惑をかけたとして、8月分の水道料金2割減免を表明。
8月15日(日)		○災害ごみの処理について県と長崎市で協議の結果、今後市ですべて対応することに決定 ○県政番組「県民のひろば」(NBCテレビ)、「県政の窓」(NBCラジオ)に保健部長、環境部長が出演、保健・環境対策を語る
8月16日(月)		○農地災害等査定設計書の作成のため被災市町村に県職員25人、土改連職員12人を引き続き派遣(～12月15日) ○高田知事、防災都市づくりのための計画策定委員会の設置構想を表明。県職員に「犠牲者の霊にこたえるためにも全力で災害復旧に取り組むよう」訓示。 ○佐世保市、土木関係の技術職員6人を長崎市へ派遣。
8月17日(火)		○住宅相談のため長崎市災害対策本部に職員を派遣(～31日) ○宅地造成規制区域内の被災地(長崎市戸町、本河内町、本原町、三川町)の現地調査 ○耕地災害復旧事業の第1次査定(～26日) ○閣議で中小企業被害が激甚災害に指定(災害救助法適用の2市8町) ○「県民のひろば」(長崎、朝日、西日本、読売、毎日、日経の各紙)に災害復旧の状況報告と救援感謝の知事あいさつを掲載(日経は19日) ○大水害による2市8町の中小企業被害の激甚災害を閣議で指定。
8月18日(水)		○県議会農林水産委員会開催及び災害現地調査(～19日) ○県議会土木委員会開催及び災害現地調査(～19日) ○県議会文教委員会開催及び災害現地調査 ○宅地造成規制区域内の被災地(長崎市西立神町、東立神町、滑石、北陽町、葉山町)の現地調査
8月19日(木)		○本河内三丁目合同慰霊祭。 ○高田知事、緊急災害救助費など総額136億3,900万円の補正予算を専決処分。
8月20日(金)	7:00	○県議会総務委員会が上京陳情(激甚災害の早期指定等について) ○国道34号の開通に伴い県営バスは始発から国道34号経由の運行を開始(県営バス全体の運行率は99.7%となる) ○宅地造成規制区域内の被災地(長崎市赤迫町、北陽町、昭和町、本河内町奥山)の現地調査 ○国道34号が応急復旧で午前7時より全面開通。長崎バイパス、国道206号も同時に規制解除。幹線道は正常に。 ○中小企業庁、中小企業被害の激甚災害指定地域を拡大。7市29町に。
8月21日(土)		○災害救助法の適用期間を延長(3回目) ○県政番組「明日のながさき」(KTNテレビ)に知事が出演、水害復旧へのあゆみを語る
8月22日(日)		○県政番組「県民のひろば」(NBCテレビ)、「県政の窓」(NBCラジオ)に農林部長、土木部長が出演、農林・土木対策を語る ○「県民のひろば」(朝日、西日本、毎日、読売、長崎の各紙)に被災者に対する特別措置などを掲載(長崎は23日) ○長崎市に再び豪雨、正午までに84ミリ。がけ崩れや浸水が続発し、開通したばかりの国道34号が一時通行不能。各被災地や危険地帯で約100世帯、300人の住民が一時避難。雨は23日未明から再び激しくなり30世帯、120人が公民館や体育館で不安な一夜を過ごす。
8月23日(月)		○県議会経済労働委員会開催 ○県災害対策本部が最終被害を発表、死者294人、行方不明5人、重傷16人、軽傷789人、被害総額3,153億1,300万円 ○都市災害復旧事業及び公共土木施設災害復旧事業第1次査定(～28日) ○県警災害警備本部を災害警備連絡室に縮小、これまでの警察官動員数延べ25,194人(福岡県、佐賀県の応援を含む) ○長崎市主催の合同葬、市公会堂で開く。市内にサイレン鳴り響き市民は1分間の黙祷。
8月24日(火)		○諫早市及び高来町から有明海のノリ漁場の被害対策について陳情 ○「県政だより」災害特集号を発行 ○「県民のひろば」(長崎新聞)に県に義援金を寄せられた方々の氏名を掲載 ○長崎青年会議所、中島川の石橋群残骸収集作業。 ○県と市が中小企業を対象に創設した災害復旧の特別融資制度が融資総額(75億円)を突破(申し込み116億円)し、融資は困難として被害証明書発行を停止。
8月25日(水)		○矢上漁協から地先漁場の災害復旧について陳情
8月26日(木)		○連合自治会代表や商店街有志で「長崎地区防災システム設置促進協議会」発足 ○宅地造成規制区域内における被災状況を国に報告

		○台風13号が北上を続け九州接近。長崎上陸の可能性もあり二次災害が憂慮され、対策本部再び緊張。
8月27日(金)		○私立高等学校の被災生徒に対する授業料軽減について、各校全生徒の父兄に通知 ○県議会総務委で災害に伴う県税12億円の減収が明らかに。災害復旧費は総額1,000億円を超える見通し。 ○台風13号は九州東部を通過。二次災害におののく住民1,000人以上が26日から避難。
8月29日(日)		○県政番組「県民のひろば」(NBCテレビ)、「県政の窓」(NBCラジオ)に知事が出演、水害復旧のあゆみを語る
8月30日(月)		○長崎防災都市構想策定委員会の発足を決定 ○立地研究所による災害現地調査(～9月2日) ○林道災害の第1次現地査定(～9月4日) ○長崎大洪水学術調査団、調査結果を発表。水害前の200ミリを越す降雨が地盤飽和をもたらし引き金になったと報告。
8月31日(火)		○災害救助法の適用期間を延長(4回目9月10日まで) ○緊急砂防事業等の採択について、建設省、大蔵省、本県選出議員に陳情(県及び長崎市ほか5町) ○住宅金融公庫総裁が災害現地を調査 ○耕地災害復旧事業の第2次査定(～9月9日)
9月1日(水)		○農業共済金の概算払い請求のため7割以上の被害水田について損害評価確認(～9日) ○国及び他県から技術職員(土木)の応援を受ける(25人、9月末又は10月末まで継続) ○長崎防災都市構想策定委員会幹事会(～3日) ○矢上ローカル線の潮見線、間の瀬線が開通し、県営バスは矢上ローカル線の一部を除き全線復旧 ○国の広報誌「時の動き」-政府の窓-(9月1日号)で長崎大洪水を取り上げ、松野国土庁長官と草柳レポートが「災害のない国土をめざして」と題して対談 ○小中高の二学期始業式。水魔に校舎が被災、友達や両親を奪われた級友の冥福を祈る追悼会が行われる。 ○県、長崎市の災害対策本部、水害相談コーナーの閉鎖など本部業務を縮小。 ○全国各県の技術職員25人が災害復旧事業の設計書作りなど応援のため長崎県入り。
9月2日(木)		○公営住宅災害査定(～6日) ○県の防災都市構想策定委員会のメンバー決まる。地元から各界各層の代表16人、中央から国土計画や都市防災の権威といわれる学者、専門家9人、行政機関5人の30人で構成。
9月3日(金)		○県議会議会運営委員会が上京陳情(激甚災害の早期指定等について) ○中島川復興委、中島川流域の洪水痕跡調査結果を発表。中心街の洪水は暗きよ化の銅座川水系に起因し、浸水の最高2.67mとしている。
9月5日(日)		○有明海のノリ漁場の災害復旧工事を実施(～16日)
9月7日(火)		○林野庁による林地崩壊防止事業計画査定
9月8日(水)		○県議会厚生委員会開催 ○日本農業土木総合研究所による被災地(長崎市西山木場、茂木)現地調査 ○県議会災害対策本部解散
9月10日(金)		○災害救助法の適用期間終了
9月11日(土)		○長崎県防災対策検討委員会発足 ○「県民のひろば」(長崎新聞)に県に義援金を寄せられた方々の氏名を掲載 ○長崎防災都市構想策定委員会発足(知事の諮問機関 昭和58年10月17日答申)
9月13日(月)		○耕地災害復旧事業の第3次査定(～22日) ○林道災害の第2次現地査定(～18日) ○公共土木施設災害復旧事業第2次査定(～25日)
9月14日(火)		○天災融資法及び激甚災害法の適用政令案を閣議決定 ○土木災害の激甚災害指定を閣議決定
9月16日(木)		○厚生省、大蔵省、自治省並びに県選出国會議員に対し、水道及び廃棄物関係の災害復旧について陳情(環境部長)(～17日) ○大村湾水産振興協議会開催(大村湾海底清掃について協議) ○林地荒廃防止施設災害復旧事業現地査定(大村市、長崎市、北有馬町、加津佐町)(～18日) ○宅地造成規制区域内における被災状況を国に最終報告
9月17日(金)		○矢上地先漁場の災害復旧(水没車輛、流木等の除去)を実施(～22日)
9月18日(土)		○公共土木及び農林関係の激甚災害指定 ○天災融資法関係政令(特別被害地域の指定)及び激甚災害関係政令(激甚災害の指定)公布施行

		<ul style="list-style-type: none"> ○自作農維持資金災害貸付限度額の特例（150万円から250万円に引き上げ）が措置される。 ○全国から寄せられた義援金は、総額30億5,990万円に（県まとめ）。うち県受入れ分は1,982件1,315,294,676円、その後も善意が相次いで寄せられている。
9月20日(日)		○農林水産省に農業共済金の概算払いを請求
9月21日(月)		○県議会で長崎大水害救援活動に関する感謝決議可決
9月24日(金)		○救援物資の受け取り及び市町村への配布終了
9月25日(土)		○NHK「明るい農村」で災害特集放映（農林部長出演）
9月27日(月)		<ul style="list-style-type: none"> ○林道災害の第3次現地査定（～10月2日） ○長崎県災害義援金配分委員会で被災市町村に対する配分額を決定
9月28日(火)		○耕地災害復旧事業の第4次査定（～10月7日）
9月29日(水)		<ul style="list-style-type: none"> ○被災市町村に対し災害義援金を配分（目録贈呈） ○大村湾水産振興協議会開催（大村湾海底清掃の実施方法等を決定） ○公営住宅の特定入居者に対する相談受付を設ける（～30日）
9月30日(木)		○農作物共済（水稲）の農業共済金支払い
10月1日(金)		<ul style="list-style-type: none"> ○長崎土木事務所に災害復興対策室を新設し災害復旧体制を整える ○他県建設技術センター等から技術職員（土木）の応援を受ける（9人、11月末まで） ○港湾災害復旧事業査定（～7日）
10月2日(土)		○長崎防災都市構想策定委員会幹事会
10月4日(月)		○都市災害復旧事業第2次査定（～9日）
10月5日(火)		○(財)長崎県児童救済基金の救済制度を改正
10月6日(水)		<ul style="list-style-type: none"> ○長崎大水害の災害対策費を9月補正予算において追加計上 ○河川激特事業の採択（中島川、浦上川）を国に要望 ○長崎市本河内高部水源池で幼児死体1体を発見、検視の結果本河内町奥山で被災した松尾小百合ちゃんと判明
10月7日(木)		<ul style="list-style-type: none"> ○市は地域防災計画見直し班、設置 ○長崎防災都市構想策定委員会幹事会 ○長崎復興のバネにと長崎くんち始まる。秋空にモッテコーイの声。
10月9日(土)		○第2回長崎防災都市構想策定委員会開催
10月12日(火)		<ul style="list-style-type: none"> ○厚生省に対し災害廃棄物処理事業等の特別補助について再度陳情（環境部長） ○大村湾の災害復旧（海底清掃）工事を実施（～16日） ○耕地災害復旧事業の第5次査定（～21日） ○公共土木施設災害復旧事業第3次査定（～23日）
10月14日(木)		○県立学校の復旧工事に着手
10月15日(金)		<ul style="list-style-type: none"> ○防災都市構想策定委員の一人である東京大学新谷教授が来県、長崎市内の災害現場を視察 ○長崎県災害危険区域の指定等に関する条例を一部改正
10月18日(月)		○長崎防災都市構想策定委員会幹事会
10月26日(火)		○耕地災害復旧事業の第6次査定（～11月4日）
10月29日(金)		<ul style="list-style-type: none"> ○二級河川改良復旧事業の採択について、建設省、大蔵省に陳情（県及び長崎市ほか10市町村） ○長崎防災都市構想策定委員会幹事会
11月9日(火)		○耕地災害復旧事業の第7次査定（～18日）
11月24日(水)		○耕地災害復旧事業の第8次査定（～12月3日）
12月1日(水)		○他県（福岡県ほか3県）から農業土木技術職員の応援派遣を受ける（8人、3月末まで、途中交替者があり延べ12人）
12月7日(火)		<ul style="list-style-type: none"> ○長崎大水害の災害対策費を11月補正予算において追加 ○耕地災害復旧事業の第9次査定（～16日）
12月20日(月)		○耕地災害復旧事業の第10（最終）次査定（～25日）
12月28日(火)		○長崎県災害対策本部を解散
1月10日(月)		○他県（鳥取県ほか7県）から農業土木技術職員の応援派遣を受ける（9人、3月末まで、途中交替者があり延べ11人）
3月12日(土)		○長崎大水害の災害対策費を2月補正予算において追加

この報告書は、災害教訓の継承に関する専門調査会の下に設けた小委員会において検討され、平成17年2月23日に開催された同調査会で承認されたものである。執筆は、

(主査) 高橋 和雄 長崎大学工学部教授
池谷 浩 財団法人砂防・地すべり技術センター専務理事
市澤 成介 気象庁予報部予報課長
沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授
川原 孝 長崎県諫早土木事務所長
佐藤 年緒 日本科学技術ジャーナリスト会議事務局長
槌田 禎子 (株)テレビ長崎報道局報道部記者
秦 康範 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター専任研究員
松井 宗廣 財団法人砂防・地すべり技術センター総合防災部長

の各委員が行い、担当は以下のとおりである。

はじめに (高橋)	第2節 交通施設の被害と復旧
第1章 災害の概要	第3節 都市施設の被害と復旧
第1節 気象の記録 (市澤)	第5章 長崎防災都市構想と市民参加
第2節 被害の記録 (秦)	第1節 防災都市構想 (高橋)
第2章 災害の特性	第2節 まちの復興と市民参加 (佐藤)
第1節 概要 (高橋)	第6章 教訓 (市澤、松井、川原、高橋、 佐藤、槌田)
第2節 土砂災害 (松井)	第1節 防災機関
第3節 河川災害 (川原)	第2節 住民
第3章 災害と情報 (槌田)	第3節 その他
第1節 長崎海洋気象台	おわりに (委員全員)
第2節 行政機関の対応	コラム (松井、川原、槌田、高橋)
第3節 報道機関の対応	
第4節 住民の対応	
第4章 災害と都市機能 (高橋)	付録 文献目録 (高橋)
第1節 概要	災害の経過 (高橋)

池谷委員及び沖委員は、報告書全体の確認を行った。

なお、事務局の担当は以下のとおりである。

久津摩敏生 内閣府防災担当企画官
亀山 夢子 内閣府防災担当主査
松田 淳吾 内閣府防災担当行政実務研修員
(兵庫県より出向)
中安 祐介 前内閣府防災担当行政実務研修員
(平成16年3月まで兵庫県より出向)

平成17年3月
内閣府政策統括官 (防災)

本報告書のとりまとめは、みずほ情報総研株式会社へ委託し、実施した。